2018 年 10 月 6 日
入ゼミ説明会配布資料

2019 年度
法学部政治学科
入ゼミ説明会

法学部政治学科ゼミナール委員会

【目　次】

◇はじめに　2

◇全塾ゼミナール委員会よりお知らせ　3

政治思想系列

大久保健晴　研究会（東洋政治思想・比較政治思想）　8

田上　雅徳　研究会（西欧政治思想研究）　10

堤林　　剣　研究会（近代政治思想史研究）　12

萩原　能久　研究会（政治思想・政治哲学研究）　14

政治・社会系列

麻生　良文　研究会（財政学・公共経済学研究）　16

大石　　裕　研究会（マス・コミュニケーション論・政治社会学）　18

大山　耕輔　研究会（行政学・政策研究・ガバナンス論）　20

河野　武司　研究会（現代民主主義）　22

澤井　　敦　研究会（現代社会理論）　24

塩原　良和　研究会（社会変動論・国際社会学）　26

竹ノ下弘久　研究会（社会階層論研究）　28

日本政治系列

小川原正道　研究会（日本政治思想史）　30

笠原　英彦　研究会（日本政治史・日本政治論）　32

玉井　　清　研究会（近代日本政治史研究）　34

地域研究・比較政治系列

出岡　直也　研究会（ラテンアメリカ地域研究）　36

大串　　敦　研究会（スラヴ・ユーラシア研究）　38

岡山　　裕　研究会（アメリカ政治研究）　40

粕谷　祐子　研究会（途上国比較政治研究）　42

小嶋華津子　研究会（現代中国の政治と外交）　44

杉木　明子　研究会（アフリカ政治研究）　46

高橋　伸夫　研究会（中国現代政治史研究）　48

国際政治系列

田所　昌幸　研究会（国際政治経済学）　50

西野　純也　研究会（東アジア国際政治・現代韓国朝鮮政治）　52

細谷　雄一　研究会（西洋外交史・国際政治）　54

宮岡　　勲　研究会（安全保障研究・国際政治理論）　56

山本　信人　研究会（国際政治・東南アジア地域研究）　58

◇2019 年度入ゼミ・スケジュール　60

【はじめに】

法学部政治学科ゼミナール委員会委員長
法学部政治学科　西野純也研究会
法学部政治学科 3 年　奥田和志

突然ですが、大学生の 4 年間のうち、学生のあなたができることは、いくつあると思いますか？学生時代にできることには限りがあります。学生時代にやるべきこととして、頭にパッと浮かぶものは、海外に行くことでしょうか。「グローバル化の現代、海外経験は必須」「長期間の休みが取れるうち学生のタイミングで、海外の国を何カ国も回るべき」。海外に行って、自分の視野を広げることも学生のうちにやるべきことの 1 つです。

もう一つ、学生のうちにやっておくべきこととして、学業があります。言わずもがな、学生の本分は学業です。慶應義塾の学生、特に政治学科の学生は、2 年間で幅広い分野を学んできたと思います。政治学は、経済や法律、国際関係、社会と密接に関わっているため、幅広い教養の知識が必要になるためです。三田キャンパスでは、政治学科の学生がより専門的な学問を身につけることができる場所になっています。その中で、学生が専門の教授と自身の興味分野を主体的に学ぶことができるのが、研究会だと考えています。新しいことを学ぶ好奇心の赴くままに、学業に没頭できる最良の研究会を探してほしい。学生諸君にこの言葉を送りたいと思います。”Boys’ Be Curious”「少年よ、好奇心を抱け」。20 歳を超えて、大人になりましたが、少年の頃のように純粋な好奇心を忘れずに持ち続け、より深いところまで探求することのできる場所が政治学科の研究会にあります。

研究会の中心となる教授は、政治分野での研究にとどまらず、国内政治や国際会議の第一線で活躍されています。本資料には各教授から二年生に向けたメッセージが掲載されています。各教授のゼミ生に対する考え方や求めることを書いてくださりました。興味のある研究会の教授のお言葉は必ず読むことをお勧めします。

本日の第 2 回法学部政治学科入ゼミ説明会は、政治学科のゼミ全体を俯瞰的に知ることのできる最後の機会です。本説明会を通じて、入ゼミを検討している学生諸君の疑問や不安が解消され、自分にとって最善の研究会を選ぶ機会になってほしいと考えています。この機会を十分に活用してくれることを願っています。

【全塾ゼミナール委員会よりお知らせ】

全塾ゼミナール委員会委員長
法学部法律学科　佐藤隆之研究会
法学部法律学科３年　須山理朗

２年生の皆さん、はじめまして。全塾ゼミナール委員会の須山です。本日は、他学部入ゼミについての紹介の機会を与えてくださりありがとうございます。

さて、皆さんが慶應義塾大学に入学してから早いもので 2 年が経とうとしています。大学院進学や資格取得に向け学業に専念される方、部活やサークルでの活動に励まれる方、インターンやアルバイトを通じて社会経験を積まれる方等、一人一人で異なる様々な大学生活があると思います。皆さんの今後の大学生活は進級に伴い、程度の差こそあれ変化することになるのではないでしょうか。最も分かりやすい変化はキャンパスが日吉から三田になることかもしれません。それ以外の重要な変化の一つは「ゼミ（研究会）へ所属するかどうか」「するとすればどのゼミに所属するか」をそれぞれ選択することだと思います。

選択するということは大変なことだと思います。その選択が今後の大学生活に大きく影響するとなればなおさらです。皆さんがそれらの選択をするうえで、皆さん自身にとって望ましい結果を得るために必要なことは何でしょうか。そのうちの一つは、情報の共有です。そのゼミが主にどういったことを取り扱っているのか、例年どれくらいの数の方々が所属することになるのか、どういった選考を行っているのかといった情報に対するアクセスは、選択を求められる皆さんのために用意されていなければなりません。

そういった必要性を満たすためにゼミナール委員会があります。各学部に設置されているゼミナール委員会が皆さんのゼミ選択のために必要となる情報を提供していきます。そして、私たち全塾ゼミナール委員会が学部の垣根を越えたゼミ選択を支えていきます。他学部入ゼミは敷居が高いとはじめはお考えになるかもしれませんが、それらの不安は全塾ゼミナール委員会に相談することで解消できると考えております。ゼミの研究内容に対する興味は、そのゼミに持続的に関わるうえでの強い動機となりますし、また日々の活動からの満足感を高めることにもつながると考えています。他学部入ゼミに興味をお持ちの方は、お気軽にお声掛けください。

最後になりますが、全塾ゼミナール委員一同は皆さんのゼミ選択が皆さんの大学生活ひいては人生にとって素晴らしいものとなりますよう、今後も尽力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

全塾ゼミナール委員会

【委員会構成】

全塾ゼミナール委員会は慶應義塾大学の公認団体であり、200 余りのゼミから成る各学部のゼミナール委員会を統括し、研究会活動に関する学生自治を任されております。当委員会は、下記の 6 つのゼミナール委員会からそれぞれ選出された 10 名により運営されています。

経済学部・商学部・法学部法律学科・法学部政治学科（各 2 名）
文学部人文社会学科社会学専攻・文学部人文社会学科人間科学専攻（各 1 名）

【意義】

本会は、各委員会に所属する研究会生の学術的活動並びに友好的交流支援により他学部他学科間の相互理解・相互連携を通して慶應義塾大学のアカデミズムの興隆に寄与することを目的とする。
（全塾ゼミナール委員会規約第 1 章第 1 条より）

【主な活動内容】

<u>他学部入ゼミ支援</u>

6 月下旬より、2 年生に対して各学部で入ゼミ説明会が行われます。学生は基本的に所属する学部のゼミに入会しますが、他学部生を受け入れている一部のゼミに入会することも可能です。そこで、学部を超えたゼミの情報収集の負担を軽減すべく、全塾ゼミナール委員会が情報提供をサポートします。
具体的には各学部の入ゼミ説明会でブースを出展、他学部入ゼミ説明会の開催、他学部入ゼミ冊子の作成、Twitter、Facebook ページ、ホームページを通じて支援致します。

<u>業界講演会</u>

塾生の皆さまが将来の進路を決定する際の一助となれるよう、多岐に渡る業界で活躍する OBOG の方々の講演を、全塾ゼミナール委員会は企画・運営しております。毎年秋学期に開催しており、本年度も皆様からのアンケートに基づき講演会の企画を進めております。

<u>全塾ソフトボール大会</u>

毎年、各学部でソフトボール大会が行われます。そしてこのソフトボール大会で勝ち上がったゼミが、学部を超えて対戦するのが全塾ソフトボール大会であり、全塾ゼミナール委員会は大会の企画運営を行います。本年度は 6 月下旬に実施します。

・全塾 HP：http://www.zenjuku-seminar.com
・Twitter：@zenjuku_keio（全塾ゼミナール委員会）
　　@zenjuku_nyuzemi（全塾ゼミナール委員会　他学部入ゼミ）
・Facebook：https://www.facebook.com/zenjuku.nyuzemi/
・問い合わせ：zenjuku.seminar.nyuzemi2018@gmail.com

他学部入ゼミについて

全塾ゼミナール委員会では、学部を超えて他学部のゼミで学びたいという意欲的な方を応援しています。下記に各学部の入ゼミの簡単な予定とFAQを載せておきますので、興味のある学部の説明会に足を運んでみてください。詳細は全塾HPに随時掲載致します。

	文学部 人間科学	文学部 社会学	経済学部	法学部 法律学科	法学部 政治学科	商学部	他学部 入ゼミ
第一回 説明会	~~7月2日~~	~~6月13日~~	~~6月30日~~	~~9月29日~~	~~6月30日~~	~~6月23日~~	~~7月7日~~
第二回 説明会	11月下旬	11月上旬	10月30日	なし	10月6日	10月20日	10月13日
第三回 説明会	なし	なし	1月中旬	なし	なし	1月下旬	なし
試験	1月下旬	12月上旬	未定 例年3月	未定 例年12月	2月上旬	3月中旬	—

＊上記は現段階で各学部ゼミナール委員会が発表しているものであり、今後日程が変わる場合があります。詳しくは各学部ゼミナール委員会のHP等で日程をご確認ください。

FAQ

Q. 他学部のゼミに所属することはできるのでしょうか？

A. 入会したいゼミが他学部生を受け入れており、入会課題や面接などを受け、入会を認められた場合、他学部のゼミに所属することが出来ます。
他学部入ゼミは基礎学力の違い、単位上の問題などある程度のリスクを伴うものです。しかし、全塾ゼミナール委員会は他学部のゼミを志望する学生に情報提供し、サポートを行っていきたいと思いますので、どんな些細なことでもお気軽にお尋ねください。

Q. 全塾ゼミナール委員会ではすべての学部・学科のゼミに関して相談に乗ってもらえるのですか？

A. 当委員会は、慶應義塾大学の三田キャンパスに所属する6つのゼミナール委員会（経済学部、商学部、文学部人文社会学科社会学専攻、文学部人文社会学科人間科学専攻、法学部法律学科、法学部政治学科の各ゼミナール委員会）から2人ずつ（文学部は1人ずつ）選出され、計10人で組織されています。そのため、上記以外の学部・学科については情報を提供できません。湘南藤沢キャンパス(SFC)、理工学部、医学部はもちろんですが、文学部教育・心理・美術その他専攻もこれに当たります。これらのゼミに興味のある方は直接そのゼミに連絡をとって頂くことになります。

Q. 自分の所属している学部のゼミと他学部のゼミの両方に所属することは可能ですか？

A. 可能です。ただし、2つのゼミを受験され両方入会を許可された場合、片方を辞退する行為は極めて失礼に当たるため、必ず両方に所属し全うして頂くようお願い致します。ゼミの活動は、予想以上に内容の濃いものです。時間的拘束など複数のゼミに所属するメリット、デメリットの両方を熟考の上、後悔しないゼミ選びをして下さい。

2018年度業界講演会

【飛び立て、無限に広がる世界へ、自分だけの舞台を求めて】

業界講演会とは、社会で活躍されている企業の方々に、その業界や社会の実情についてのお話をしていただくというイベントです。22回目となる本年度は、「様々な業界の講演に参加し、今まで知らなかった世界へと視野を広げることで、自分の可能性もより広げていってほしい」という願いを込めました。本年度は、以下26企業の方々にご講演をお願いしております。

【ご案内】

場所：南校舎ホール（三田キャンパス）　時間18：30～20：00　※申し込み不要・参加

10/2	コンサル①	マッキンゼー・アンド・カンパニー
10/3	新聞	朝日新聞社
10/4	テレビ	日本テレビ放送網株式会社
10/9	航空①	全日本空輸株式会社
10/10	総合商社	伊藤忠商事株式会社
10/11	保険	東京海上日動火災保険株式会社
10/12	IT	グーグル合同会社
10/16	消費財	P&Gジャパン
10/17	航空②	日本航空株式会社
10/18	旅行	株式会社JTB
10/24	外資金融	ゴールドマン・サックス
10/25	鉄道	東日本旅客鉄道株式会社
10/31	総合商社②	三菱商事株式会社
11/1	官庁	東京都庁
11/7	コンサル	野村総合研究所
11/8	証券	野村證券株式会社
11/27	海運	日本郵船株式会社
11/28	エンタメ	ソニーミュージックグループ
11/29	不動産	三菱地所株式会社
12/4	広告	株式会社電通
12/5	食品	味の素株式会社
12/6	映画	東宝株式会社
12/7	出版	株式会社講談社
12/11	飲料	サントリーホールディングス
12/12	化粧品	株式会社資生堂
12/13	銀行	株式会社三菱UFJ銀行

皆様のご来場を、心よりお待ちしております。　　全塾ゼミナール委員会一同

政治学科　各研究会　紹介

（専門分野の系列順、担当教授の五十音順）

以下の研究会は、来年度のゼミ員を募集しません

赤木完爾　研究会
烏谷昌幸　研究会
小林良彰　研究会
添谷芳秀　研究会

大久保健晴 研究会

－東洋政治思想・比較政治思想－

1. 大久保先生より

わたし達が生きている東アジア世界は、今日まで、どのようにして作り上げられてきたのでしょうか。そして今後、いかなる未来へと進もうとしているのでしょうか。大久保健晴研究会は、このような大きな問題関心のもと、東アジアにおける政治思想について歴史的な視座から比較・検討することを主題とします。

現在、東アジア情勢は緊迫化した事態に直面し、先行き不透明な展開を見せています。北朝鮮問題、尖閣諸島や竹島といった領土を巡る争い、慰安婦問題など東アジア諸国相互の歴史認識や歴史教育の相違、中国政府の少数民族政策、南シナ海の領有権問題、日本における集団的自衛権や憲法を巡る論争、アメリカとの関係、靖国問題、沖縄の基地問題など。これらは、私たちの日々の政治や経済、文化や社会生活と極めて密接な関係を持っています。本研究会では、こうした現代的な諸課題を念頭に置きつつ、しかしそれを直接的に取り上げて論じるのではなく、なぜそのような問題が生まれてきたのか、今一度、歴史を遡り、近世・近代東アジア世界の成り立ちと変容を明らかにするところから検討を始めます。

もちろん、これらの問題を考える上では、西洋世界との文化接触にも目を向ける必要があります。西洋と東アジアとの間の外交、経済、学術、法を巡る交渉史に光を当て、東アジア諸国相互における学問の継受、ナショナリズムの勃興など、その重層的な構造を解明する。そうした作業を通じて、現代における政治思想的な諸問題を、世界史的な視座から読み解く力を養います。

具体的には、ゼミ生の間で共通テーマを定め、輪読やグループ・ワーク、ディベート、レポート報告などを通じて理解を深めていきます。その上で、個々の問題意識をより明確にさせながら、卒業論文の執筆に取り組みます。なお、このゼミで求められることは、他者の意見に耳を傾けずに、一方的に自らの「思想・信条」をまくし立てるような態度ではありません。そうではなく、様々な「政治思想的な問い」を巡って、歴史的観点から多くの史料を正確に読み解き、立場の異なる様々な人々の見解に誠実に耳を傾け、深く悩みながら、多面的な視座から考察を導いていく、学問的姿勢です。

研究報告や討論を通じて、自らの生きている社会の成り立ちやあり方について、自分の頭で考え、自らの言葉で周りの人々を説得できる力を身に付けることが、本研究会の最終目的です。こうした能力こそ、今後さまざまな場で活躍する皆さんが最も求められるスキルでもあるのです。

2. 研究対象

近世から近現代へと至る、西洋世界と東アジア諸国との文化接触、ならびに東アジア世界における政治思想や国際秩序の成り立ちと変容について、研究します。

3. ゼミ生の構成

3 年生　21 名/4 年生　22 名

4. 他学部生の受け入れ

可

5. ゼミ生からのコメント

東洋政治思想と聞くと難しそうなイメージを持たれるかもしれませんが、先生のわかりやすい解説によって理解することができるので、まったく心配ありません。先生はとても温厚な方で、その先生のもとゼミ生が発表を行い議論を深めるということを、各々が主体性をもって行っています。東アジアという我々が現在住んでいる地域の問題について大学生活をかけて学ぶということは、とても価値のあることではないでしょうか。西洋世界を視野に入れながら、東アジア世界と日本の関係を学んでみたい方の参加を心よりお待ちしております。

6. ゼミの進め方

2017 年度、3 年生のゼミは木曜 3 限に開講されています。春学期はテキストの輪読やグループ・ディスカッションを通じて、基礎的な知識を身につけます。夏合宿ではディベートを行い、秋学期は三田論の作成に取り掛かります。4 年生は木曜 4 限に、毎週交代で卒論の中間報告を行っています。

7. 使用文献

・境家史郎『憲法と世論―戦後日本人は憲法とどう向き合ってきたのか』（筑摩選書）
・岡本隆司『世界のなかの日清韓関係史』（講談社選書メチエ）
・苅部直『「維新革命」への道―「文明」を求めた 19 世紀日本』（新潮選書）
など

8. ホームページアドレス

・HP　http://tokubosemi.wixsite.com/okuboseminar
・Twitter　@TOkubosemi

9. 連絡先

〇ゼミ代表
安藤陸　riku_andu0430a@yahoo.co.jp/吉岡紗希　sakinnu02@gmail.com
〇入ゼミ担当
竹内梨紗　fl3263.risa@gmail.com/新倉悠平　maindish0815@gmail.com

田上雅徳 研究会

－西欧政治思想研究－

1. 田上先生より

政治思想史のゼミを受け持つ者として、私は自分を、お見合いの場を設定する「仲立ち」になぞらえて考えることがあります。

私自身の主たる研究テーマは「欧米における政治と宗教の相克関係」ということになりますが、入会してくるゼミ員諸君は必ずしも、これに最初から強い関心を寄せているわけではありません。にもかかわらず、このテーマが導き出す諸問題とその重要さを若い人たちに考えてもらいたく、ゼミ運営をこれまで行ってきました。

ただ有難いことに、授業時間内におけるゼミ員の報告や討論から、また三田祭論文集と卒論から、ややマニアックな研究会を開講する意義のようなものを、何度となく私は感じ取ることができました。幸せなことです。たとえば、教室では主として西洋史上の古典をめぐって議論がなされますが、毎回のようにゼミ員諸君はそこで、西欧 13 世紀のお坊さんや近代の無神論者が残した言葉に対する共感や違和感を率直に表明してくれます。そして、そうした感情を抱く自分自身の姿を、あらためて見つめ直してくれます。大げさにいえば、自分たちと全く異なる環境に生きる人びとと向かい合った若い人の世界や人間の見方が変わる瞬間を、私はこのとき目撃しているわけです。

こういうわけで私は、思想史を学ぶことに面白さがあるとすれば、それは「出会い」の楽しさかな、と思うようになりました。そして今後とも、こうした「出会い」の場を皆さんに提供していくつもりです。少々のおせっかいは承知の上です。皆さんには、私が「よかれ」と思って紹介する思想家たちと、まずは騙されたつもりで向かい合って頂きたい。それぞれクセはありますが、普段まずお目にかかれないような面白みのある人びとです。なるほど反発し合うだけで終わる「出会い」があるのも確かですけれども、真摯に対話した後での反発は、それはそれで貴重な経験になるはずです。

もちろん、不幸な「出会い」は避けるに越したことはありません。ですから私も、相手に関する最低限の情報は提供します。けれども、お見合いの場には必ず次の台詞がつきもの、「では、あとはお二人だけで……」。こうして、その後折りに触れ付き合っていける思想家と皆さんとの「良縁」が生まれれば、「仲立ち」としてこれ以上の喜びはありません。

「出会い」を通じて、新たな自分を形づくってみたい人、また自分が守ろうとしているものが何なのか見つめ直したい人、そのような人たちをこの研究会は歓迎します。

2. 研究対象

主に宗教に関連する政治思想（本年度は「中世」中心）についての研究

3. ゼミ生の構成

3 年生　17 名、4 年生　20 名

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

私たちのゼミはユーモア溢れる田上先生のもと、アットホームな雰囲気で活動しており、ゼミ後は先生も交えて飲みに行ったりしています。サークルや部活動と両立している人も多くいることから、忙しい人でもしっかりと学べる環境が整っているかと思 います。ぜひ個別説明会やオープンゼミに足を運んで、雰囲気を感じとってみてください。

6. ゼミの進め方

◇ 本ゼミ（水曜 4・5 限）

前期のゼミでは輪読を中心に進めています。毎週課題の本を全員が読み、内 3 人の担当者が指定範囲について考察し、レジュメを用意して発表します。その発表にゼミ員と先生がそれぞれ指摘を加えていく討論形式のゼミになります。討論とはいってもその雰囲気は和やかなものです。後期は三田論の作成に向けたグループワークとなります。

7. 主な使用文献

A.E.マクグラス『プロテスタント思想文化史』、G.S.サンシャイン『はじめての宗教改革』など

8. ホームページアドレス

https://tanoueseminar2018.wixsite.com/tanoueseminar

9. 連絡先

〇22 期生外ゼミ代表 古澤佑一朗

〇22 期生入ゼミ担当 前田公平、待場景太、嶋菜々子

〇Twitter アカウント：@tanouezemi

〇メールアドレス：tanoueseminar2018@gmail.com

堤林剣 研究会

－近代政治思想史研究－

1．堤林先生より

当ゼミではデモクラシーを実践しています。もちろん、私は指導教員なのでいくつかの重要な特権は保持していますが、多くの事柄については（例えば、輪読文献の決定やさまざまなイベントの企画）ゼミ生の自主的行動に任せています。ですので、知的刺激とユーモアに満ちたアカデミック・コミュニティーづくりに積極的に取り組んでくれる学生を期待しています。幸いにも、現在に至るまで（つまり、1 期生から 15 期生まで）チャレンジ精神が旺盛で個性的なゼミ生に恵まれてきました。今後もこうした雰囲気と伝統が続くことを願っています。

デモクラシーが堕落するとアナーキーになり、最終的には恐ろしい僭主が登場して最悪の事態を招くというのは古代ギリシア以来の政治学的常識です。したがって、デモクラシーがまともに機能するためには有徳な市民が存在しなくてはならないのと同じように、ゼミも民主的に運営するのであれば、そこには「有徳なゼミ生」が求められることになります。ともかく、私には僭主願望はありませんので、自由でお互いの個性をリスペクトできるような、知的にしてユーモラスな雰囲気が続くことを切望しています。

さて、ゼミでの研究内容ですが、ここでもゼミ生の自由が尊重されますので、各々のゼミ生は自由なテーマで三田祭論文と卒業論文を書くことができます。重要なのは、自らの頭を最大限に働かせ、明確な問題意識の下、学問をするということです。ただ、当ゼミが掲げる看板は政治思想ですので、ゼミで輪読する文献は基本的には思想のテクストになります。具体的に何を読むかはゼミ生と相談して決めますが、少なくとも前半は政治思想の古典（プラトン、アリストテレス、マキアヴェッリ、ホッブス、ロック、ルソー、ミルなど）にしたいと考えています。また、毎週行うゼミでは、何よりもディスカッションを重視します。単に文献を読んで知識を頭の中に詰め込むというのではなく、文献を批判的に吟味しつつ自らの意見を展開し、他のゼミ生の意見と戦わせ、その対話の中から何かを発見する（「多事争論」）というプロセスが重要なのです。

以上のような方針でゼミを行いたいと思いますので、個性的で批判精神が旺盛で、思想に興味がある学生は奮ってご応募ください。

2. 研究対象

西洋政治思想

3. ゼミ生の構成

4 年生　22 名

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

堤林ゼミのいいところは自由度の高さです！毎授業で取り扱う文献はゼミ生で話し合って決めたり、論文のテーマに縛りがなかったりと、自由に学ぶことができます。自分の学びたいことを持っている人、逆にまだ探している人にとてもおすすめです。また、議論での先生のお話はとても興味深く、毎回新たな発見があります。ぜひ、堤林ゼミで学びましょう！お待ちしています！

6. ゼミの進め方

◇　3 年生（水曜 4 限）

◇　4 年生（水曜 4・5 限）

7. 主な使用文献

・『政治哲学』デイビット・ミラー

・『国家』プラトン

・『政治学』アリストテレス

etc

8. ホームページアドレス

https://tsutsumin.wixsite.com/tsutsu-semi

9. 連絡先

〇15 期生外ゼミ代表

中村紗子

〇15 期生入ゼミ担当

池上まり・脇谷拓武・馬林颯

tsustsumibayashizemi2019@gmail.com

萩原能久 研究会

－政治思想・政治哲学研究－

1. 萩原先生より

「政治思想は難しい」という声をよく聞く。たしかに、例えばヘーゲル哲学に代表されるような、馴染みにくい難解な用語にうんざりさせられ、数頁読んだだけで投げ出したくなるような思想書が多いのも事実である。思想を勉強するということが、このような難解な用語を使いこなし、他人を煙に巻くような議論の仕方を習得することであるという偏見ともいえるイメージが学生のあいだに定着しているのもうなずける。また、「政治哲学」などを勉強して何の役に立つのかという声もよく耳にする。哲学書は寝つきが悪い時の誘眠剤として役に立つだけであるというシニシズムは今はおくとしても、大半の学生にとって、「政治思想」は、卒業必要単位のなかに入っているからやむなく履修するというのが正直なところであろう。現状がこうであるので、不本意ながら、まず強調しておきたいのだが、私はこのような「役にもたたない知識」をインテリ受けするファッションとしてもてあそぶ「思想オタク」を育成することに何の関心もない。私のゼミでは、私たちが毎 日を生きている社会の現実について「自分の悟性を働かせて考える」ということの基本的トレーニングに徹したいと思う。自分自身の日常から出発することもなく、また自分の頭で吟味してみようともせずに「借り物」の思想をしたり顔でつまみ喰いすることなど、「哲学」の名にも値しないと考えるからである。自分の頭で考えるということは、なかなか勇気のいることである。私のゼミでは、書物や支配的学説という「権威」に盲従することなく、ラディカルに(字義どおり「根底から」)自分で考え直すということがひとりひとりに要求される。「考えるとは乗り超えて行くことである」と述べたのはエルンスト・プロッホであったが、ゼミの学生には是非とも昨日までの自分自身を乗り超えて、その先まで行って欲しい。別の言い方をするならば、そのことが「自由」の意味であると私は考えている。生きていくかぎり、わたしたちは不断に選択をしていかなければならないのだが、 正しい選択をするためには、他人から提供された選択肢のメニューを鵜呑みにするのではなく、どれだけの選択肢が現実に存在しているのか、自分自身で確認しなければならないし、そこで既成の選択肢に満足できないならば、新しい選択肢そのものを自分で作り出していかなければならないのである。自由への道はその意味でいばらの道であるが、これを怠ると、選ぶべき選択肢を他人から操作され、無知の状態に追いやられたままそれに気づかず、いつわりの自由にうかれるという「幸福な奴隷」に転落してしまう。考えるべきテーマは多い。政治、正義、 倫理、教育、文化とリストをあげていけばきりがない。このどれもが、「収入」に直結しないという意味で、「役に立たない」知識である。それにもかかわらず、現代を生きる人間が、自由な人間としてよりよく生きようとするかぎり必要で有用な知識なのである。しかしながら、 他人である私が、学生に「自由」たるべく「強制」するということは矛盾である。「教育」と「洗脳」は紙一重なのである。学生が自分の悟性を使用して自己決定することができることを願ってのものであれ、教師がそのように外側から働

きかけるのは「他律」による「自律」の形成以外の何ものでもない。極端な話、奴隷状態に満ち足りている人を「解放」して「餓死する自由」を与えるのは、当の本人にとって余計なお世話になりかねないのである。したがって、私のゼミを志望する学生諸君には、その困難さを自分で引き受けようとする気構えだけは是非とも持っていて欲しい。別の言い方をするならば、私はゼミを、単なる教育・研究の場として位置づけているのではなく、自分を取り巻く状況について自分で考えることによる「人間形成」の場であると考えているのであり、その場にあっては、私自身も他のゼミ員と同じく一参加者にすぎないということである。すべてがマニュアル化され、それなしでは不安で生きていけないというのでは情けない。人生にも、そして政治哲学にも、これ一冊ですべてがわかるという「教科書」などは存在しない。私のゼミの学生には、せめて自分の人生のマニュアルは自分で作っていって欲しい。その手伝いをするのに私はやぶさかではない。

2. 研究対象

政治思想・政治哲学。毎年扱うテーマは異なります。ちなみに 2018 年度の三田祭論文のテーマは「ポストコロニアリズム 」、2017 年度は「ナショナリズム」でした。

3. ゼミ生の構成

3 年生：24 人　　4 年生：19 人

4. 他学部生の受け入れ

原則として一次募集のみ可（現在法律学科 2 名在籍）

5. ゼミ生からのコメント

萩原ゼミは学生が社会に出たときに最も必要とされるであろう「自分で考える力」の育成に最適な場所です。またみんなで考え抜いて意見を交換していくことによって「発言力」や「論理的な思考」が身につきます。

もちろん、勉強面以外でも萩原ゼミには魅力があります。まず、夏には沖縄でゼミ合宿が行われ、ゼミ生同士で親睦を深めることができる上に、ダイビングなどで沖縄能見を満喫することもできます。またゼミでもイベントでも 3 年生と 4 年生が常に同じ空間にいるため、学生の垣根を超えた繋がりを形成しやすいのも萩原ゼミの魅力だと思います。

是非、個別説明会やオープンゼミに足を運んで雰囲気を感じ取ってみてください。

6. ゼミの進め方

◇本ゼミ（水曜 4・5 限）：担当グループ（5〜6 名）がレジュメを作成し、それをもとにディベート形式でゼミを行います。

7. 使用文献（2018 年度春学期）

本橋哲也著『ポストコロニアリズム 』、E.D.サイード著『オリエンタリズム』、ガヤトリ.C.スピヴァク著『サバルタンは語ることができるか』、ジグムント・バウマン著『自分と違った人たちとどう向き合うか　難民問題から考える』マイケル・ウォルツァー著『解放のパラドクス』、菊地夏野著『ポストコロニアリズムとジェンダー』

8. ホームページアドレス

http://www.clb.mita.keio.ac.jp/law/hagisemi/index.html

9. 連絡先

〇ゼミ代表：中川 太郎　〇入ゼミ担当：塚越 直樹、平井 啓太、小野 櫻

〇入ゼミアドレス：hagisemi2018@gmail.com　〇Twitter アカウント：@hagiwaraseminar

麻生良文 研究会

－財政学・公共経済学研究－

1. 麻生先生から

麻生研究会では、財政学・公共経済学を中心に研究を行います。公共経済学は政府活動の根拠や政府活動の効果など公共部門のあり方を議論する学問です。伝統的な財政学とほぼ同じ領域をカバーしますが、ミクロ経済学の応用という側面が重視されるという特徴を持っています。

財政政策のあり方、税制、地方分権、社会保障制度、再分配政策など、わが国の抱える政策課題の中でも最も重要なものは、公共経済学の知識がなくては理解できません。重要なのは、日々の報道を追いかけて何となく「政治」がわかった気になることではなく、体系的な知識をしっかり身につけることです。そのためには標準的な理論を学ぶ必要があります。問題の歴史的経緯や制度の詳細を調べる際にも同じことがいえます。よく「歴史に学べ」と言われますが、歴史家の視点を形成するのも「理論」です。歴史家の視点が古臭い理論に基づいていることはよくあることですが、その場合、歴史からはそれなりの教訓しか引き出せないでしょう。

当研究会では、3 年生の段階ではまず共通の文献を購読し、基礎理論の習得に努めてもらいます。そして、秋学期にはグループごとに具体的なテーマについての研究をおこなってもらいます。また、4 年生は 1 年をかけて卒論に取り組んでもらいます。扱う内容は、かなり広範囲です。例えば、過去の三田祭発表や卒論では、市町村合併、道路公団改革、ゴミ問題、知的財産権、財政投融資制度改革、土地問題、年金・医療、アベノミクスなどの問題が取り上げられています。

来年度のゼミで取り上げる具体的なテーマについては未定ですが、ゼミ生の要望も踏まえ柔軟に対応します。どのテーマであれ、最初は公共経済学、財政学の教科書等の輪読をすることになります。なお、ある程度専門的な文献を読んでいくためには統計学・計量経済学の知識が必要不可欠です。このため、理論分析に加え、統計データの分析にも力を入れたいと考えており、最近は統計ソフト R を用いて計量経済学の解説と実習も行っています。

2. 研究対象

財政学、公共経済学

3. ゼミ生の構成

3 年生 15 人、4 年生 11 人

4. 他学部生の受け入れ

可

5. ゼミ生からのコメント

麻生良文研究会は法学部政治学科のゼミでありながら唯一経済学を扱っているゼミとなります。扱う対象は公共経済学と言われる、税金や政府の政策などです。ゼミではパワーポイントを用いての発表を行いますので、新社会人となった際に活きてくること間違いなしです！また本ゼミの特徴としてゼミ生同士はもちろん教授とも非常に仲が良いことが挙げられます！もちろん強制ではありませんがゼミ後は打ち上げに全員で行くこともしばしば…？先生の裏話が聞けちゃうことも！？普段の活動は博識な麻生先生の講義を中心に真面目に行っていますのでメリハリがしっかりしているゼミでもあります。気になった方はぜひ麻生良文研究会へ！！

6. ゼミの進め方

・本ゼミ（水曜 4・5 限）、サブゼミはなし

7. 主な使用文献

『地方税改革の経済学』、『財政学 15 講』

8. ホームページアドレス

@AsoSeminar2019（本年度は Twitter をご参考ください）

9. 連絡先

・16 期外ゼミ代表

k.taketoogata.o@keio.jp

・16 期入ゼミ担当

hikarukoyagi@gmail.com

大石裕 研究会

―マス・コミュニケーション論・政治社会学―

1. 大石先生より

私は、朝起きると必ずテレビをつけます。それから新聞も読みます。大学に出てからは、いくつかの新聞を読み比べることもあります。同じ新聞でも、新聞によって伝える内容がことなっていたり、解説や社説が違っていたりするからです。もっと詳しい情報を知りたくなると、インターネットで検索することもします。

こうして私の1日が始まります。「ニュースについて考えること」、それが私の重要な研究課題だからです。私たちは、よほどのことがない限り、新聞やテレビで伝えられるニュースを「事実」として受け取ります。それはなぜでしょうか？皆さんご存知のように、第二次世界大戦中の日本の新聞やラジオは誤った情報を伝えていました。その反省に立って、戦後、マスコミは事実を「客観的」に報道することを心がけてきました。また、社会であまり関心が持たれない出来事についても、それを発掘してニュースにするということをしてきました。

もちろん、時に誤った情報を流すこともありますが、全般的に私たちはマスコミをそれなりに信頼していると言っていいでしょう。その一方で、マスコミ批判は絶えません。様々に批判されながら、なぜマスコミは今のやり方を変えないのでしょうか？実は、ニュースを作っている人たちも、私たち一般の人々とかなり似通った考え方をしているから、という解答をしてみましょう。そうすると、かなりの疑問が解けます。日本社会の一般の人々は、アメリカの有名な政治家や芸能人の情報は入手したがります。でも、よほど悲惨な映像でもない限り、第三世界の政治問題に目をむける人は少数しかいません。

こうした私たち、一般人の関心をもとにして、情報は取捨選択され、ニュースは作られます。言うなれば、私たち、新聞読者・テレビ視聴者とマスコミは「共犯関係」にあるのです。日本のマスコミについて論じるということは、日本社会について論じることなのです。マスコミ研究、ジャーナリズム研究というのは、実は自分が住んでいる社会、そして自分自身を知ることにつながるのです。

こうした問題関心を共有できる人、そうした学生を本研究会は歓迎します。

2. 研究対象

マス・コミュニケーション論、政治社会学

3. ゼミ生の構成

3 年生 18 名、4 年生 20 名

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

当ゼミでは、マス・メディア報道、世論、政策の関連についての社会運動を事例とした政治コミュニケーション研究及びニュースの生産過程を中心としたジャーナリズムの研究をしています。様々な文献をもとに、ゼミ生各々がレポーターとなり自分の考えや問題提起を行うことによる活発な議論が行われます。

ゼミ中は和やかでアットホームな雰囲気の中、授業が行われます。大石先生の丁寧なご指導のもと、時に楽しく、時に真剣にゼミは進んでいきます。先輩後輩の繋がりも強く、勉強だけでなく就活の話や個人的な交流も強いです。

6. ゼミの進め方

◇本ゼミ（3 年生：水曜 2 限）

各自が文献を読んで用意したレポートを持ち寄り、上がった問題提起をもとに先生と議論を交わします。1～3 週間に 1 冊ほどのペースで、その文献のレポーター（3～5 人）を中心に疑問点や批判点を問題提起し、議論します。

◇サブゼミ（水曜 3 限）

研究員と大学院生がご指導してくださります。社会学系の文献を中心に読み進めます。進め方は本ゼミと同様に問題提起や討論で、レポーターは 2 人です。6 月頃から、この時間を使って三田祭論文の準備や発表を行います。

◇合同ゼミ（水曜 4 限）

3・4 年生合同で授業を受けます。4 年生はこの時間のみの出席となります。ここでは 3 年生の 1 週間の気になる記事を解説する新聞紹介、後期からはそれと同時に 4 年生の卒業論文発表が行われます。

7. 主な使用文献

『批判する／批判されるジャーナリズム』、『憲法と世論』、『メディアの中の政治』、『八月十五日の神話』など

8. ホームページアドレス

https://oishiseminar1819.wixsite.com/keio-oishi

9. 連絡先

○22 期生入ゼミ担当

小林杏太郎、近藤泰一郎、藤枝有咲、城葵衣

oishiseminar2019@gmail.com

○入ゼミ用 Twitter アカウント

@ooishi2019

大山耕輔 研究会

―行政学・政策研究・ガバナンス論―

1. 大山先生より

私のゼミのモットーは「よく学びよく遊ぶ」です。通常のゼミ活動への積極的な取り組みはもちろんですが、ソフトボール大会、早大政経学部縣公一郎ゼミとの合同ゼミ等々、すべてを楽しんでいます。以前は、中大佐々木信夫ゼミとディベート試合を楽しみました。

研究対象は行政や公共政策ですが、統治能率を追究する伝統的な「国家中心の行政」より、行政は納税者の望むように税金を使っているか、政策は効果があったか等を監視する「ガバナンスの行政」や「民主主義の行政」の視点で研究しています。

「社会-生態システム論におけるガバナンスの概念」『法学研究(慶大)』90(3):1-31, 2017年3月、『公共政策の歴史と理論』(監修、ミネルヴァ書房、2013)、『比較ガバナンス』(編著、おうふう、2011)、『公共ガバナンス』(ミネルヴァ書房、2010)、『エネルギー・ガバナンスの行政学』(慶大出版会、2002)、『行政指導の政治経済学』(有斐閣、1996) 等はそうした視点からまとめた著作です。

ゼミ生の進路は、政治家・公務員・学者･ジャーナリスト・企（起）業家・ビジネスパーソンなど多様です。「ガバナンスの行政」の視点からは、多くの人びとに関わる公共的な問題の解決のために積極的に貢献する人間が望まれます。が、まずは、4 年の夏合宿からゼミを放棄することなく、卒論を書いてゼミ OB に加わる根性を見せて欲しいです。

現代日本の行政システムを扱うことが多いですが、行政や公共政策に関わることであれば何でも研究対象になります。また、研究対象に応じて多様なアプローチが可能です。少数事例法(ケーススタディ)、多数事例法(計量分析)、比較(国家、自治体、政策)等ですが、最近は、因果関係の特定や政策効果の評価などに威力を発揮する統計的手法を積極的に学んでいます。統計的手法は、英語と同様、社会人になっても必要なツールです。

週 1 回の本ゼミが中心ですが、3 年生は、三田祭論文の共同研究をするため、サブゼミがあります。本ゼミでは、行政学や政策研究の先行研究をフォローしながら、論点や問題点を発見したり討論したりして、いろいろな理論を検討･考察します。4 年生は、各自が興味を抱いた理論に基づいて、リサーチクエスチョンと作業仮説を立てて検証する作業を繰り返しながら、卒論を完成させます。三田祭論文やよい卒論は、政ゼミ委が編集発行する学術雑誌『政治学研究』に積極的に発表するよう指導します。こうして、自分の頭で考え選択して責任をとる独立自尊の納税者をめざします。

なお、公務員希望者に対する特別な配慮はしませんが、採用試験の一般的な情報提供、ゼ

ミ OB の紹介、ダブルスクールや大学院進学のアドバイスや相談等を行います。脱公務員の時代と言われますが、優秀な人材が公務員の道に進むことも、将来の日本にはとても大切なことです。

2. 研究対象

行政学、政策研究、ガバナンス論

3. ゼミ生の構成

3 年生　14 人　4 年生　14 人

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可。原則として政治学科生と同等に扱うが、他学部生の枠は全体の１割（２人）程度を考えています。

5. ゼミ生からのコメント

大山ゼミは、政治学科では数少ない行政学を学ぶゼミです。「よく学びよく遊ぶ」をモットーに様々な行事に意欲的に取り組んでいます。今年度ソフトボール大会は、4 年生 3 年生ゼミ員一丸となって、ソフトボール大会では法学部政治学科の中で優勝という成績を収めました！また、普段から参加できるゼミ員で集まって遊ぶなどゼミ員同士の親睦を深める機会を設けています。

ゼミ活動においては、教授・院生の方々に丁寧かつ熱心なアドバイスをしていただき、4 年生が親身になって助言をしてくれるため充実したゼミ活動を行うことができます。体育会も所属し、様々な人がいることも魅力です。また、公務員志望や大学院進学、多種多様な一般企業への就職等将来に関してもたくさんの道が選択できます。実際、先輩方も多種多様な業界において活躍されています。質問などがあればぜひ連絡してください。

6. ゼミの進め方

◇本ゼミ（水曜 4 限）

文献を輪読し、毎回、発表者と討論者によって提示された論点を元に、全体でディスカッションを行います。院生にも参加していただき、活発な議論を交わしています。

◇サブゼミ（水曜 5 限）

三田祭論文の発表に向けて、テーマやアプローチ方法について議論し、早稲田大学・縣ゼミとの合同ゼミ等の中間発表の場を経て、一つの論文を完成させていきます。

7. ホームページアドレス

https://oyamaseminar18th.jimdo.com/

8. 連絡先

Oyamaseminar18th@gmail.com

・18 期生外ゼミ代表　　齊藤智弘（さいとう　ともひろ）
・18 期生内ゼミ代表　　常松真菜（つねまつ　まな）
・18 期生入ゼミ担当　　増田朋子（ますだ　ともこ）、坊良圭介（ぼうら　けいすけ）

河野武司 研究会

－現代民主主義－

1. 河野先生より

「人民の人民による人民のための政治」というリンカーンの有名な言葉を君たちも知っていることでしょう。このように治者と被治者の同一性をその基本的特徴の一つとするデモクラシーには 2 つの大きな流れがあります。直接民主制と間接民主制です。もともと古代ギリシアの都市国家アテネにおいて直接民主制として花開いたデモクラシーですが、今日の民主主義国家のほとんどが間接民主制を採用しています。しかし、間接民主制は最善の政治制度とは言えません。時に機能不全に陥ることがあります。例えばフランスの思想家ルソーは、イギリスの代議制を批判して、「イギリスの国民は選挙の時だけ自由で、あとは奴隷」という言葉を早くも 200 年ほど前に遺しています。この言葉は残念ながら過去の遺物ではありません。間接民主制の下で現実にわれわれ国民が選ぶことのできるのは政策を決定する政党や政治家であって、政策ではないのです。現実には、選挙に勝利し政権を担当することになった政党に次の選挙までの間は政策の形成と決定を一任することになります。このようなエリートが形成し決定する政策は、果たして民意を反映しているのでしょうか。市場中心主義の導入や、格差の拡大とその固定化を日本の国民は望んだのでしょうか。しかし一方でわれわれ市民は自らの未来を正しく選択できるほど、十分に情報を持ち、主体的に政治に参加できるような存在になっているのでしょうか。シュンペーターが定式化したリーダーシップ獲得のための競争の装置というエリート主義的民主主義論はあまりにも有名です。

政治的無関心が蔓延する現代において、もし代議制民主主義が機能不全に陥っているとするならば、それを超える IT 時代の 21 世紀に相応しい新しい民主主義のあり方を直接民主制と間接民主制の間に構想しようというのが、このゼミにおける基本的課題です。

私は私の研究会が学生諸君にとって「良き師、良き友、良き本」という 3 つの出会いの場になれればと考えています。このすべてとは言わないまでも、どれか 1 つにでも出会えれば、研究会への加入は有意義なものであったということができるでしょう。もちろんこのような出会いのためには、研究会へ臨む君たち自身の心構えも重要です。フリーライダーになることなく、研究会の様々な活動に対して、主体的に参加できる意欲的な学生の入会を期待します。

2. 研究対象

IT など、新しいテクノロジーを利用した 21 世紀に相応しい民主主義のあり方を考える。キーワードは現代日本政治、民主主義、半直接民主制、インターネット、政治的コミュニケーション、マスメディア、情報、世界各国の民主化度、格差、投票参加、主権者教育など。

3. ゼミ生の構成

3 年生　22 人　4 年生　25 人

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可。

5. ゼミ生からのコメント

河野ゼミの特徴はなんといってもその楽しさです。男女、先輩・後輩問わずとても仲が良く、イベントも頻繁に開催されます。そして仲がいいからこそ授業中の議論も活発で、自分の意見や疑問に感じたことをどんどん言うことのできる環境が整っています。ゼミ生全員が勉強にも遊びにも全力で取り組み、充実した大学生活を送っています。

6. ゼミの進め方

本ゼミ（3 年水曜 4 限、4 年水曜 5 限）では担当者が課題本の担当箇所のレジュメを作成し発表します。発表後にはゼミ員各自の問題意識に基づいて議論を交わします。4 年は卒論の中間発表を重ねて卒論を完成させます。サブゼミ（3 年水曜 5 限）では各々の関心にしたがって班に別れ、グループワークを行います。他大学と対抗のディベート大会に出場するディベート班、政治現象の計量的な分析法を学び三田論を書く三田論班の 2 つがあります。

7. 使用文献

輪読で使用する文献は、ゼミ生と相談して決めるので、年度によって異なります。ちなみに 2018 年度は下記の文献を読んでいます。

コリン・クラウチ『ポスト・デモクラシーー格差拡大の政策を生む政治構造ー』

イーライ・パリサー『フィルターバブルーインターネットが隠していることー』

コリン・ヘイ『政治はなぜ嫌われるのかー民主主義の取り戻し方ー』

８．ホームページアドレス

http://www.clb.law.mita.keio.ac.jp/kohno/　　ツイッターアカウント　@kohno2019

9. 連絡先

15 期外ゼミ代表　山田大智　daiyamadachi@gmail.com

15 期入ゼミ担当　川村梨英　riekawamura@keio.jp

山田俊幸　kinakina96@gmail.com

桑原小夏　konatsunomail@gmail.com

宮川昂也　riandree508@gmail.com

秋山靖　yasu11063709@gmail.com

澤井敦 研究会

－現代社会理論－

1. 澤井先生より

本研究会が専門とするのは「現代社会理論」ですが、実質的には「社会学」全般が対象です。研究会の基本的な目的は、多様な展開をみせる現代社会理論（消費社会論、リスク社会論、リキッドモダン論、個人化論、格差社会論、情報環境論、……）をひとつの基盤としながら、現代社会の様々な動向（自我や人間関係の様相、家族や組織の様相、文化や社会意識の様相、国家や社会の様相……）について、具体的に考察を深めていくことです。

授業は、社会学および社会理論の基礎知識の習得を目的とする「共同研究」と、各自の卒業論文作成に向けての「個別研究」を並行させてすすめていきます。

① 共同研究　共同研究では、社会学や社会理論の基礎的な文献を共同で輪読し、報告と討論をおこないます。社会学や社会理論の基本的な考え方を身につけ、共有し、応用力を身につけることがここでの目的です。共同研究は、②の個別研究の基礎づくりともなるものです。また、同じ主旨で、サブゼミでも、テーマごとにわかれてグループ研究をおこない、研究成果を三田祭前の 3・4 年合同報告会や三田祭展示にて発表しています。

② 個別研究　個別研究では、卒業論文に向けての各自の研究経過・成果の報告、質疑応答、討論をおこなっています。3 年次には、三田祭論文（10000 字程度）、4 年次には、卒業論文（25000 字以上）を作成し、それぞれ『三田祭論文集』『卒業論文集』としてまとめ、公表しています。卒論は、4 年間の各自の学業の集大成であり、ある種の記念品となるべきものでしょう。重要なのは、自分が本当にこだわれるテーマを見つけだすこと（とはいえこれは意外に難しいことです）、そして、文献読解・情報収集やゼミでの討論をつうじて他者の意見や情報を知り、（場合によっては、フィールドワークやインタビューに出向き）、それをつうじて、他者のものではない、と同時に独りよがりのものでもない、「これこそ自分のもの」と言える考えを論文のなかで立ち上げていくことです。一言でいえば、「論文のなかで自分を立ち上げる」、これが、研究会での研究の基本的な目標であり指針です。したがって、卒論のテーマは、現代社会の動向に関するものであればよく、特に制限は設けません。ただし、論文が、学問的な手続き、また社会学・社会理論の知見や研究方法をふまえたものになるよう、アドバイスをしていきます。以上のようなことを真剣にやってみたいという皆さんの参加を、大いに期待しています。

2. 研究対象

社会学、現代社会理論

3. ゼミ生の構成

3 年生 18 人　　4 年生 20 人

4. 他学部生の受け入れ

可能

5. ゼミ生からのコメント

個別研究は、各自の研究についてのディスカッションも活発におこなわれるので、そこで周りの意見などを取り入れ、より自分の研究を深めることが可能です。ゼミ生は社会学への関心が高く、互いにアドバイスしあい、学びを深めています。澤井教授はとても優しい方で、ゼミ生の意志を尊重してくださり、研究に関わる相談にも親身になってアドバイスをくださいます。同期間・先輩後輩間ともにとても仲がよく、皆さんも本ゼミなら信頼できる先輩・同期を必ずや得ることができると思います。

6. ゼミの進め方

・本ゼミ（火曜 4 限）

春学期は定められた社会学の文献について輪読し、担当者が内容をレジュメにまとめ、考察などを発表する。内容理解を深めていき、また担当者の考察に対して議論を交わしていくことで、社会学の基礎を身につけるだけでなく、興味関心を広げる。秋学期は、三田論など、各々のテーマに沿って、随時中間発表などをおこないながら研究をすすめていく。

・サブゼミ（火曜 5 限）

4～3 人ずつ 5 つのグループに分かれ、グループごとに研究を進めている。テーマは各グループで話し合って自由に決めており、「小学生のスマートフォン利用について」や「なぜ行列はできるのか」など、様々である。中間発表をとおし、他のグループの意見を取り入れ、研究を深めることができる。三田祭での発表をゴールとしている。

7. 主な使用文献

工藤保則・大山小夜・笠井賢紀編『基礎ゼミ社会学』世界思想社、2017 年

見田宗介『現代社会の理論』岩波新書、1996 年

本田由紀『社会を結びなおす—教育・仕事・社会の連携へ』岩波ブックレット、2014 年

8. ホームページアドレス

https://sawaiseminar.wixsite.com/sawaisemi

9. 連絡先

13 期内ゼミ代表　akari.ny.1998@gmail.com　13 期外ゼミ代表　abe-hirono@keio.jp

塩原良和 研究会

－社会変動論・国際社会学－

1. 塩原先生より

このゼミでは、近代から現代に至る産業構造の転換、技術革新、資本主義の発展と、それらにともなう人々の価値観、文化、政治、経済の変容をマクロ／グローバルな視座から考察する「社会変動論」と呼ばれる社会学の領域を扱います。そのなかでも、既存の国家の境界線を越える人々（移住者・旅行者・労働者）の移動のあり方と、それによって引き起こされる国民国家の社会・文化・政治・経済的変容（多民族・多文化社会化）を理論的・実証的に分析する「国際社会学」を中心に学びます。僕自身の研究者としての関心は主にオーストラリアと日本を題材とした「多文化主義（多文化共生）」の理論的・実証的分析ですが、それに限らず、社会変動論／国際社会学全般に関連するトピックに関心があれば、どなたでも入ゼミを志望できます。

ところで、大学生はいったい何のために大学で学問をするのでしょう。答えはその人のキャリア形成のあり方や、学問分野によっても違ってきます。しかし社会学についていえば、「社会をこれまでとは違った視点（あるいは、他者からの視点）で見られるようになるため」だと、僕は思っています。それにより、これまで見えなかった課題や問題点を見つけ、より良い社会へのオルタナティブな道を構想する。こうした意味での（単なる非難や誹謗とは異なる）「批判的」な視座を鍛えることが、社会学、特に社会変動論を学ぶ目的・意義です。

そのためには、学問的知識の蓄積や論理的思考力の訓練がもちろん必要です。しかし同じくらい重要なのは、社会と他者に対する想像力です。この社会には自分とは異なる経験を生きている人々がいることに思いを致し、そうした他者たちにとってのリアリティを想像する力が土台にあってこそ、学問的知識や論理的思考力は僕たちに批判的かつ生産的な知的果実をもたらしてくれます。

このような想像力を養うためには、教室の外に出て学ぶことも必要です。このゼミではゼミ生全員に、大学の外でのフィールドワークに参加していただきます。それはいわゆる社会学的現地調査とは少し異なり、「現場（フィールド）」でさまざまな活動を「実践する＝汗を流す（ワーク）」中で主体的に学ぶという、サービスラーニング、アクティブラーニング教育の要素を取り入れています。具体的には東京近郊のNPO と協働して、外国にルーツをもつ若者や生活保護受給家庭の若者との交流・支援活動にボランティアとして参加していただくことになります。

このように、このゼミは政治学科のなかではやや異色です。このゼミならではの学びと経験をゼミ生が得られるように、みなさんとともに努力したいと思います。

2. 研究対象

ゼミ全体としては主に国民国家の多民族・多文化化の現状、多文化主義・多文化共生の理論や政策につ

いて、フィールドワークと文献講読を通じて学びます。それに加えてゼミ生は個々に研究テーマを選んで個人研究論文を執筆します。個人研究のテーマは社会変動論／国際社会学に関連していればどんなものでも構いません。

個人研究テーマの例：①国境を越える人の移動（移民、難民、外国人住民、旅行者、国際結婚、帰国子女、留学、ビジネスなど）と、それがもたらす国民社会の変容（多民族・多文化社会化、多文化主義・多文化共生、シティズンシップ、トランスナショナリズムやコスモポリタニズム、エスニシティとナショナリズムなど）。　②現代におけるさまざまな社会変動（グローバリゼーションと政治・経済の変容、コミュニティと居場所、新自由主義と福祉国家、ライフスタイルやアイデンティティ、家庭、教育、ジェンダーやセクシュアリティ、価値観や文化の変容など）。

3. ゼミ生の構成

10 期：24 人（内 3 人留学中）　9 期：19 人　8 期：3 人

4. 他学部生の受け入れ

特に排除せず、法学部政治学科の学生と同じ基準で選考します。ただし他学部・他学科からの応募が非常に多い場合は、政治学科のゼミ生の数を一定程度確保するために人数調整を行うかもしれません。

5. ゼミ生からのコメント

塩原ゼミの雰囲気はとてもよく、ゼミ生がとても個性的で多様性に満ちています。フィールドワークや話し合いに参加することで、先輩後輩関係なく、仲を深めることができます。興味が少しでもある方は是非ブースにお越しください！お待ちしております。

6. ゼミの進め方

以下は、現時点で予定している来年度の運営方針であり、変更される可能性があります。

◇ 本ゼミ（月曜 3・4 限を予定）

①ゼミ生の個人研究報告やフィールドワーク関係の話し合い等（週 1 コマ）。

②文献講読（週 1 コマ）：多文化主義・多文化共生または社会変動論／国際社会学等の専門書（学部専門課程レベル・主に日本語）。年間 8 冊前後。

◇ フィールドワーク：週 1 回（2～3 時間）程度、授業時間外に大学の外で実施します。参加日は複数の曜日・時間帯から学生の都合にあわせて選択可能です。フィールドワークの趣旨・内容は上記 1 を参照してください。フィールドワークはこのゼミにおいては必修なので、必ず、かつ積極的に参加できる方を優先します。

7. 主な使用文献

ゼミ生の個人研究テーマの傾向やその時々の社会状況に応じて、毎年文献を変えています。原則として入門書ではなく専門書を読みます。

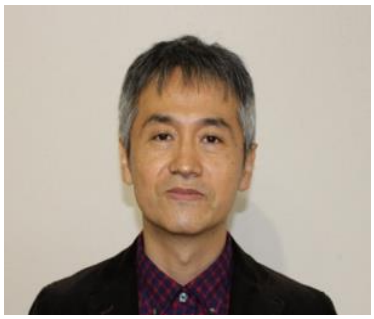
8. ホームページアドレス

http://shiobaraseminar.jimdo.com/

9. 連絡先

入ゼミ担当

白井　pupmug97@gmail.com　日吉　haruka.hiyoshi@gmail.com　大村　ohmuraasuka@gmail.com



竹ノ下弘久 研究会

－社会階層論研究－

1. 竹ノ下先生より

本研究会では、担当教員である竹ノ下弘久の専門領域である社会階層論を主たる領域に、研究会の活動を進めていく予定です。社会階層論では、人々が現代社会を生きていくために必要な社会的資源の不平等な配分のあり方に注目し、資源の不平等配分が生じる社会的メカニズムを考察します。

その際、ライフコースの視点から、家族、学校教育、労働市場という 3 つの重要な社会的空間、諸制度に焦点をあて、これらの空間、制度の中で、不平等な資源配分が生まれるメカニズムを明らかにします。そのため、家族社会学、教育社会学、労働・産業社会学が交差する領域を扱います。また不平等は、階級・階層という経済的次元でのみ生じるのではなく、ジェンダーや人種・民族という属性的次元においても生じます。そして、階層論が考察する社会的資源・資本には、所得や職業といった経済資本や獲得した学歴などの人的資本だけでなく、人間関係やパーソナル・ネットワークといった社会関係資本、教養や知識、学習への構え、文化的趣味といった文化資本も含まれます。そして、どのような不平等が生じるかは、マクロな次元での諸制度にも大きな影響を受けます。その中には、労使関係、労働市場構造、家族政策、福祉・雇用政策、教育制度といった、政治経済的諸制度が含まれます。以上みてきたように、社会階層論は、社会的資源の不平等配分という観点から、社会学が対象とする様々な論点を扱う研究領域です。また、社会階層論は、これらの研究を進めていくにあたり、社会調査によって収集された統計的、質的なデータにもとづいて研究を進めていくことを重視します。

以上のような論点について、受講学生と相談のうえ、講読する文献を選び、授業を進めていきます。文献購読とあわせて、統計的データの実証分析も行います。来年度は、今年度、千葉県内の 2 つの自治体から委託を受け、竹ノ下研究会に所属する 3 年生を中心に行っている「人権問題に関する住民意識調査」のデータの再分析や、階層や不平等に関わる全国調査のデータの 2 次分析を行うことを考えています。また、貧困や不平等をテーマとするフィールドワークを行うことも考えています。

また、社会調査の方法論についても、受講学生と相談のうえ、学習していきます。以上の論点に関心のある学生の受講を歓迎します。

2. 研究対象

人々が現代社会を生きていく中で必要な社会的資源の不平等の在り方に注目し、不平等が起こるメカニズム等をできるだけ客観的な立場から考察します。家族、学校教育、労働市場という 3 つの重要な社会的空間、制度に焦点を当て、社会調査によって収集されたデータから、社会の仕組みや構造を統計学の手法を使って明らかにすることを重視します。

3. ゼミ生の構成

3 年生 20 名／4 年生 22 名

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

竹ノ下先生はとてもやさしく、気さくな方で、ゼミ生も個性的で楽しい人が多いため、毎回のディスカッションは和やかな雰囲気で行われます。また先生はより良いディスカッションを行うために積極的な発言を求めます。社会問題に関心がある方は、もちろん、あまり知識のない方でも、残りの学生生活を有意義に過ごせるかと思います。

6. ゼミの進め方

・本ゼミ（月曜 5 限）

ゼミ生全員が毎週出される課題文献を読み、予習ノートを作り、それをもとにグループ（5～7 人）でディスカッションを行い、全体にその内容を共有します。6 月後半から 7 月は 4 年生の研究発表を 3 年生が聴き、その内容についての質疑応答を行っています。

・サブゼミ（月曜 4 限）

春学期は統計ソフト SPSS の使い方を学びます。秋学期では、三田祭合宿に合宿の調査結果をまとめていきます。

7. 主な使用文献

石田浩『教育とキャリア』勁草書房　他

8. ホームページアドレス

作成中

9. 連絡先

2 期生外ゼミ代表／野呂優太（yuta-yghb1112@keio.jp）

2 期生入ゼミ担当／荻野遥香（twinkletink@hotmail.co.jp）

小川原正道 研究会

－日本政治思想史－

1. 小川原先生より

本研究会では、幕末から戦前期を中心にした日本政治思想史、日本政治運動史をテーマとして扱っています。研究の視角としては、思想や運動の担い手となった「個」に焦点を当てており、福沢諭吉 や慶應義塾を切り口としながら、それらと関わりを持った「個」の思想や運動について、探求していきます。たとえば、福地源一郎、中江兆民、田口卯吉、徳富蘇峰、山路愛山、北村透谷、三宅雪嶺、陸羯南、高山樗牛、内村鑑三といった福沢諭吉と同時代に活躍した知識人・思想家、西郷隆盛、木戸 孝允、大久保利通、伊藤博文、井上馨、山県有朋、松方正義、大隈重信、三条実美、岩倉具視、といった福沢と同時代に活躍した政治家、福沢のもとで学び、政界・官界・学界・財界などで活躍した門 下生たち、適塾で福沢と共に学んだ同窓生たち、などの「個」です。

研究会では、3 年次は上記のような特定の研究テーマに沿った共同研究に取り組み、文献講読や研究発表を重ねて、三田祭での研究発表(ポスター展示、論文集の刊行)を目指します。基礎知識を補うため、基礎文献を読み込むサブゼミも実施します。4 年次は卒論執筆のための研究発表を重ねます。卒論のテーマは、戦前の日本政治思想史、政治運動史に関わるものを幅広く認めています。このほかにも、首都圏の史跡を探訪する「史跡巡り」も行っています。春と夏にはゼミ合宿を実施しており、 他大学との合同合宿などを通じて、学問の輪を広げる試みも続けています。

こうした学びを通じて、論文の書き方やレポートのまとめ方はもちろん、プレゼンテーションの手法、情報収集・分析の手法、ディスカッションやディベートの能力などを身につけることができます。そして何より、学びを通じて得られる友人との絆、指導教授との関係、他大学生との輪などは、皆さんにとって生涯の貴重な財産になるでしょう。

せっかく慶應義塾に学んだのですから、義塾の持つ歴史的な遺産を発掘しながら、生涯の財産となる人との絆といった、貴重な学びの時間をもって欲しいと思います。そのために必要となる環境を、日本政治思想史・日本政治運動史という側面から提供していきます。

2. 研究対象

明治維新期をはじめとして、現代に至るまでの日本政治思想史および運動史を、主とした研究対象としています。

3. ゼミ生の構成

3 年生 16 人　4 年生 17 人

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可(若干名)

5. ゼミ生からのコメント

小川原ゼミでは、ゼミ員に担当箇所が割り振られ、その研究・発表が主要な活動です。対象へのアプローチは様々で、明治時代や大正時代の本、雑誌、新聞やこれらが集成されたデータベース、最新の論文などを用います。近現代史と重なる部分が多いため、政治学と歴史学の両方を深く学べることが、小川原ゼミの特徴と言えます。小川原先生は寡黙ながらも、ゼミ員に対して研究手法や資料の紹介、発表についての的確なアドバイスを下さいます。院生の方々からも、それぞれの視点から助言を頂けます。

6. ゼミの進め方

◇本ゼミ(火曜 3 限)

発表者が、自らの担当分野について、研究の進捗状況や見えてきた課題などを報告します。それを受けて、まずゼミ員同士で質疑応答を行い、次いで小川原先生や院生の方々からの指摘、助言を頂きます。

◇サブゼミ

3 年生は週 1 回サブゼミに参加し、このゼミで学ぶに当たっての基礎知識を身につけます。担当者は、文献の指定された箇所について発表し、院生の方の指導を受けつつ、ゼミ員と議論します。

7. 主な使用文献

本ゼミでは個人研究が主となるため、共通の使用文献はあまりありません。また年度により異なります。伊藤正雄編『明治人の観た福澤諭吉』慶應義塾大学出版会、2009 年

サブゼミでは共通の文献を用いています。

坂本多加雄『日本の近代 2 明治国家の建設 1871~1890』中央公論新社、2012 年 福沢諭吉『福翁自伝』『福沢全集緒言』

8. ホームページアドレス

http://www.clb.law.mita.keio.ac.jp/ogawara/

9. 連絡先

〇8 期生外ゼミ代表　南原 理沙

〇6 期生入ゼミ担当　宮崎 高行、井手 一貴、渡辺 茉莉花

連絡先 ogawaraseminar@gmail.com

笠原英彦 研究会

－日本政治史・日本政治論－

1. 笠原先生より

ここ数年、日本の政治や行政を取り巻く環境は大きく変化してきた。2012 年末の政権交代以来、自公政権は長期安定政権の様相を呈しているが、対外的には外交・安全保障、通商問題などへの対応を迫られている。グローバル化の進行に伴い、両者はますます密接な関係をもつにいたっている。

現政権の下では、金融の異次元緩和や財政出動、構造改革の推進により、自動車など輸出関連産業を中心に一見景気は回復したかにみえる。しかし、格差は拡がり、国民は景気回復を実感していない。

今世紀に入り、ヒト、モノ、カネなどが瞬時に国境をこえて拡大するグローバル化の波が、容赦なく日本の政治や経済を直撃し、景気回復や経済成長に冷水を浴びせてきた。そのため、日本政治がこうしたグローバリゼーションとどう向き合うかが大きな政治課題となっている。

それでは、日本政治はグローバル化とどう向き合うべきか。多角的な通商交渉だけでなく、アジア・太平洋地域における外交・安全保障のあり方を冷静に注視し、日本の国益に資する戦略と交渉力が求められる。今こそ政官民が一体となって、国益を追求すべきであろう。

これからの日本にとって重要なのは、エネルギー政策や食料安全保障なども含めた、いわゆる総合安全保障と、年金、医療、介護、子育て支援など少子高齢化に対応するための社会保障であろう。日本の社会保障制度は深刻な制度疲労を起こしており、大胆かつ精緻な制度改革案の策定が強く求められている。

当ゼミでは、以上のような問題意識の下に、総合安全保障や社会保障の問題を取り上げ、歴史的アプローチも加えながら、政策形成と政策決定のプロセスを検証しつつ、これまでの政策判断の当否を明らかにしてゆきたい。

来年度も、3 年次には、「日本政治の課題―少子高齢化と日本の社会保障」をテーマに共同研究を進める予定である。4 年次には、各自の関心に基づき、広く日本政治に関する卒論研究を行う。古代日本政治史や現代の皇室制度なども含め広範なテーマ設定が可能である。

3 年次の三田祭共同研究と 4 年次の卒論の作成のすべてを「消化」することで、ゼミの活動は完結する。意欲ある学生諸君の参加を大いに期待してやまない。

2. 研究対象

笠原研究会では日本の政治・行政・歴史を研究対象としています。今年度春学期の本ゼミでは、日本の社会保障についての基礎知識を「年金」「医療」「介護」の三分野の視点から輪読などを通して身につけ、現在は三田論にむけて「介護保険制度」について研究を進めています。

3. ゼミ生の構成

3 年生…9 人

4 年生…11 人

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ不可

5. ゼミ生からのコメント

ゼミでは文献や論文といった、いわゆる先行研究と呼ばれるものを使用して研究を進めますが、自力では理解が困難なものであっても、先生や先輩方の指導の下、安心して研究を行えます。雰囲気は非常にアットホームで、発言しやすい環境で議論を進めています。また、社会保障がテーマなので国家公務員志望のゼミ生も在籍しています。

6. ゼミの進め方

本ゼミでは、年度ごとに定められた研究対象に関する文献を輪読し、担当者がレポーターとして内容をレジュメにまとめて報告し、コメンテーターが論点を挙げ、それに基づいて議論を行います。

サブゼミでは、本ゼミの延長線上に位置し、文献の輪読や、三田論・卒論の執筆に向けての議論を行います。研究に対しての主体性がより一層求められます。

7. 主な使用文献

広井良典『日本の社会保障』

8. ホームページアドレス

http://www.clb.law.mita.keio.ac.jp/kasaharazemi/

Twitter アカウント　@kasaharakeio

9. 連絡先

29 期生外ゼミ代表…酒井はるか、29 期生入ゼミ担当…加藤玲奈・中川恭介

kasaharazemi28@gmail.com　　☆質問等、お気軽にご連絡ください！

玉井清 研究会

－近代日本政治史研究－

1. 玉井先生より

近代日本政治（明治～昭和戦前期）を主たる専攻領域とし、同時代の社会・文化・経済の動態、さらには新聞・雑誌を中心としたジャーナリズム、言論、思想界の動向をも視野に置いた多角的研究を行う。「賢い民族は歴史から教訓を学ぶ」という。今日の日本を分析する場合も、今後の日本の針路を考える際にも、生きた政治史は、諸君に貴重で有益な示唆を与えてくれる資料の宝庫である。この宝庫に足を踏み入れる感動を体験したい者への道案内をするのが本研究会の目的である。

ゼミ 2 年間のスケジュールは大略、次の通りである。まず 3 年の前半には、時代の大きな流れをつかむために近代日本政治の基本文献を精力的に読み討論する。（従って、当該領域の知識が不足していることを心配する必要はない）。また資料の収集・整理分析の方法・論文の書き方なども同時に学んでもらう。夏休み以降は、三田祭で発表するテーマに即し、ゼミ一丸となって調査研究に取り組む。（「政治危機とマスメディア」と題し、テロや暗殺、戦争などの政治危機に際し、我が国のマスメディアがいかなる反応を示したか、近代日本政治史上の事例研究を通じてその問題点を考察する）。上記の勉強を基盤に 3 年の後半から卒論のテーマを次第に明確にしてゆき、中間発表を繰り返しながら研究を進める。そして 4 年の卒業前の指定日までに卒論を完成し提出する。なお論のテーマは、冒頭に示した時代に関するものであれば、政治家・軍人・言論人の個人研究から、政党・軍部・官僚などの組織・戦略研究・新聞雑誌の政治放送を分析するマスメディア研究、あるいは政治史上の事件を焦点にして取り上げた研究でもよい。各人の趣味と関心に基づき自由に選択する。

入会に際しての条件は、まず大学生活における本籍を当研究会に置くことが可能なことである。つまりサークル等、いかなる団体に所属していてもかまわないが、ゼミの活動（春・夏の合宿・新歓等のコンパ）を最優先にすることを求める。またゼミの活動に責任を持ってあたり、自主的・積極的に参加することである。この条件を満たすものであれば、大歓迎である。大学入学後、スポーツや娯楽を通じた喜びしか味わったことのない諸君、学問研究を通じた知的冒険に旅立ち、自らの視野を広げ新たな発見をする知的興奮を体験したくはないか。教師や他のゼミ員とともに、この知的感動を求め旅する意欲があり、残りの大学生活の悔いを残すことのなきよう充実したゼミを望む学生の入会を期待する。「厳しく、しかし楽しく」、これが本研究会のモットーである。

2. 研究対象

主に近代日本政治と言われる分野。具体的には明治～昭和戦前期の政治を主たる専攻領域とし、同時代の社会文化、経済の動態、さらには新聞・雑誌を中心としたジャーナリズム、言論・思想界の動向をも視野に置いた多角的研究を行う。

3. ゼミ生の構成

・3 年生 12 名　　・4 年生 16 名

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

まず、春学期に近代日本史の文献を読むので、世界史選択でもまったく心配いりません。毎回のゼミで新しい学びがあり、ゼミ一丸となって全力でゼミ活動に取り組む場所が玉井ゼミにはあります。同期はもちろん、学年を超えて仲が良いのも玉井ゼミの魅力だと実感しています。玉井先生のわかりやすい説明を聞きながら、充実したゼミ生活を送ってみませんか？

6. ゼミの進め方

〇本ゼミ（水曜 4・5 限）…3 年生は事前に基礎文献の購読をし、要旨担当者（1 名）とコメンテーター（2、3 名）を中心に議論を進める。4 年生は卒業論文構想を各週発表していく。

〇サブゼミ（水曜本ゼミ後）…3 年生のみで行われるゼミで、主に三田祭で発表する論文冊子（資料集）作成のため、テーマ決定や議論、発表などが行われる。

7. 主な使用文献

・鳥海靖『日本の近代＝国民国家の形成・発展と挫折＝』放送大学教育振興会
・村瀬信一『帝国議会＜戦前民主主義＞の五七年』講談社
・北岡伸一『政党から軍部へ』中公文庫

8. ホームページアドレス

・HP: http://tamaiseminar.main.jp/

9. 連絡先

・入ゼミ担当　江橋麻由
・Email: tamaiseminar2019@gmail.com　　・Twitter: @tamaikiyoshi

出岡直也 研究会

－ラテンアメリカ地域研究－

1. 出岡先生より

日本では、ラテンアメリカ研究というと、マイナー、特殊という印象が強いかと思います。そして、クーデタと独裁者、「ラテン的ないい加減さ」、ドラッグといったステレオタイプ的なイメージに安住しているのではないでしょうか。

しかし、第一に、世界におけるラテンアメリカの重要性は、日本で多くの人が考えているよりもずっと大きなものです。そして、多くの問題を抱えつつも、ほとんどのラテンアメリカ諸国では民主主義体制がもう 25-30 年以上は続いています。一方で民主主義の理念は強く、他方で、長いあいだ民主主義を安定できない政治を続け、民主主義が維持されるようになっても大きな問題を抱えるこの地域の諸国の政治を学ぶのは、圧倒的にスリリングです。そうした相克の中で多くの社会運動や思想が生まれ、それは世界全体に影響力を持ち、モデルのようになった場合もあります。近年の例を挙げれば、新自由主義改革が明確に進んだため、その政策について、また、その修正や否定から生まれた政治の様々な動きについて、世界的なモデルを提出していることが指摘されています。

第二に、ラテンアメリカ諸国の政治を研究することは、政治現象一般に関して多くのことを学ぶのに役立ちます。第一の点とも関連しますが、ラテンアメリカ地域研究は、権威主義体制、民主化、新しく民主化した諸国の政治のあり方などに関する政治学において、決定的に重要な役割を果たしてきました。

そうした一般的な重要性と同時に、やはり「ラテンアメリカ」が他と違う地域として持つ魅力が大きいのは言うまでもありません。音楽やスポーツ、そこの人々の素敵さなど、その一端はよく知られていることと思います。そうした地域について深く知ることは、とても楽しいです。よって、次のような方が大歓迎です。(1)ラテンアメリカ自体に元来関心がある人。(2)日本からの「遠さ」や「違い」に魅力を感じてラテンアメリカやその政治を学びたいと思う人。(3)貧困や経済発展の困難など、「南」に関わるテーマを、そうした現象がみられる地域の一つで学びたいと考えている人。先に述べたように、これらのテーマについても、ラテンアメリカ研究には多くの蓄積があります。(4)権威主義体制、クーデタ、

民主化、新しく民主化した諸国の政治などについての政治学に関心がある人。ただし、ラテンアメリカ地域研究が、日本では確かに「マイナー」であるかもしれないこともあり、本ゼミでは英語文献の購読が多くなると思います。また、ゼミの運営では、ゼミ生の方々の自主性を重視したいと思います。それらに伴うかもしれない苦労をいとわず、ディスカッションの場では積極的に発言し、何よりしっかりと(でも、楽しく)研究する意欲を持つ、やる気がある方を歓迎したいです。

2. 研究対象

メキシコ、中米、カリブ海、南米を含む「中南米」における政治を中心としますが、 社会問題・文化等についても研究することもできます。個々の参加者の研究テーマは、広範囲に及び自由に決めることができます。対象も自由で、単数の国でも、複数の国の比較でも、地域全体でも可能です。 例 年民主主義といった政治問題に取り組むゼミ生がいるとともに、スポーツや教育、料理外交を中心に政治に与える影響を取り扱っているゼミ生もいます。

3. ゼミ生の構成

3 年生：9 名　4 年生：10 名

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可。ただし政治学科の生徒が優先

5. ゼミ生からのコメント

出岡直也研究会はラテンアメリカ地域研究を行うゼミです。各学年 10 人の少人数の構成です。水曜日の 3、4 限に活動しています。普段のゼミでは、発表形式がおおく、ラテンアメリカに関する興味のある分野の論文を持ち寄り、各自発表しています。政治や経済に関するものから、文化や芸術に関するものまで、様々なテーマで発表するのですが、出岡先生はどの分野に関しても詳しく、毎回解説やアドバイスをくださり、とてもためになります！ 卒業論文のテーマもラテンアメリカに関するものであれば、自由です。

6. ゼミの進め方

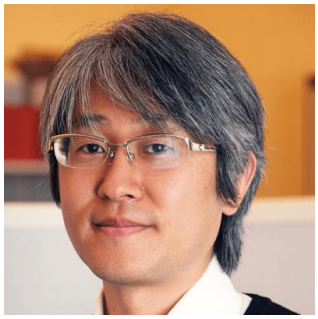
◇本ゼミ（水曜 3・4 限予定）

3 年次前半には、2 週間に一度のペースでラテンアメリカ諸国の政治についての英語文献を購読しビブリオバトル形式で発表を行います。

例）第 1 週は A 班 4 名が発表、第 2 週は B 班 4 名が発表。

注意事項として、学生が主体的に本気で考えるという体験を阻害しないよう、本ゼミ活動中の電子機器(PC・スマートフォン)の使用を禁止としておりますので、ご理解の上エントリーをよろしくお願いいたします。

７．連絡先　Twitter: @izuokazemi2018



大串敦 研究会

―スラヴ・ユーラシア研究―

1. 大串先生より

「スラヴ・ユーラシア地域」といわれて、皆さんはどのようなイメージを抱くでしょうか。そもそもそれがどこをさす地域なのか、ピンと来ないという人も少なくないかもしれません。ロシアなど旧ソ連・東欧地域のことですが、「旧ソ連」という言葉自体が使われなくなってきていますので、代わりに「スラヴ・ユーラシア」と呼ばれるようになってきました。この地域は多くの魅力に満ちています。文学、映画やバレエといった文化はもちろんですが、政治学を学ぶ者にとっても、この上なく魅力に富んだ地域です。

モスクワの街を歩いているとすぐに気が付くことですが、きわめて多様な民族の人がまじりあっています。ソ連という「帝国」の首都だったので、今でも一定の求心力があって、ロシア国内はもちろん、周辺諸国からも多くの人が集まってきます。そして、ここでは詳しく述べられませんが、そのソ連「帝国」の在り方は、今日の民族問題を考察するうえで、世界的にみても興味深い事例を提供しています。

またこの地域は、1917 年と 1991 年に大規模な体制転換、「革命」を経験しています。これらの革命はただの革命ではなく、世界史的大事件でした。革命論、体制転換論を考察するのに、これ以上興味深い地域は他にあるでしょうか。

1991 年の体制転換後には、連邦制、準大統領制の憲法体制、複数政党制による競争選挙、議会制度など他国と共通する政治制度の導入を試みましたが、この試みがほとんどゼロから始まったがゆえに、諸政治制度を発生にさかのぼって考察することを可能にしているのもこの地域の特徴です。

また、体制転換後、この地域の諸国は、民主制から個人独裁に近い体制まで、きわめて多様な政治体制を生み出しました。よく考えてみれば、世界のかなりの国は、依然として非民主的な政治体制を持っています。民主制はもちろん、非民主制のメカニズムを理解するためにもこの地域は有意義なのです。

さらに、わが国には乏しいといわれて久しい、個性的な政治指導者を（レーニン、スターリンからゴルバチョフやプーチンまで）この地域は輩出してきました。政治的リーダーシップの問題を考えるうえでも、この上なく興味深い地域です。

そして、国際政治の上では、20 世紀国際政治史はソ連抜きに語ることはできません。今日でも、再び地域大国として台頭しつつあるロシアが、世界政治を揺るがすところを、我々は数年来ウクライナやシリアで目撃しています。ロシアは、国際関係の色々な場面――軍備

管理から資源外交、未承認国家問題、対テロ戦争に至るまで――に大きな影響を持っています。

この研究会では、比較政治学・国際関係の様々な角度からこの地域の政治を考察していきます。政治学の主要任務の一つが他者理解であるとするならば、これほど興味深い地域はなかなかないのではないか、と私は思っています。学生の皆さんと一緒に、地域と政治に対する理解を深めていきたいと思います。

2. 研究対象

研究対象は、スラヴ・ユーラシアについてです。ロシアや旧ソ連、ウクライナを中心に政治・経済・社会について学びます。また、比較政治地域学、国際政治学からの観点のみならず、政治思想など多様な見地から政治学を研究していきます。

3. ゼミ生構成

11 名

4. 他学部生の受け入れ可否

受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

ロシアという国はアメリカや中国と並んで世界的に影響力のある国です。しかしながらアメリカや中国ほど真剣にロシアを学ばれた方は少数だと思われます。本ゼミでは現代ロシアについても学べるのでニュースなどを見る視点が変わってくると思います。そして大串先生はこの間までヘルシンキに留学されていたため、現地のお話も伺うことが出来るのが本ゼミの魅力です。

ゼミの雰囲気についてですが、大串先生はとても優しく気さくな方で、ゼミ員も優しく、面白い人が多いです。また、ゼミ員それぞれがゼミ以外にも様々なことに力を入れており、部活と両立しているゼミ員もいます。なので勉強だけではなく様々なことと両立することができます。

6. ゼミの進め方

3 年生の前期は主に旧ソ連や東欧諸国について文献購読をし、知識を深めていってもらいます。そして前期途中からは現代ロシアや英語の文献を読んできてもらいます。英語力はなくても大丈夫です。詳しくは HP を参照してください。

7. 使用文献

HP を参照してください。

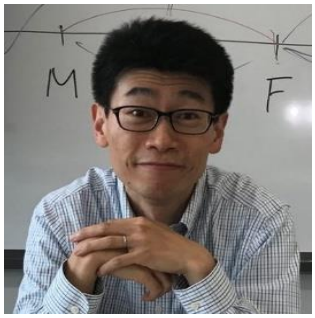
8. ホームページアドレス

https://ogushiseminar.wordpress.com/

9. 連絡先

外ゼミ代表　谷川　s.t.pooh503@gmail.com

入ゼミ係　　椋木　aphananthe.aspera0615@gmail.com　twitter：@ogushiseminar2



岡山裕 研究会

―アメリカ政治研究―

1. 岡山先生より

本研究会は、アメリカ合衆国の内政を対象にしています。アメリカについて日本のニュース等で見聞きしない日はない位なので、何となくわかった気になりがちですが、その割にきちんと理解されていないように思います。例えば、アメリカの連邦議会には、議員達が日本のように政党ごとにまとまって投票しないという重要な特徴がありますが、それはなぜでしょうか？かつてよりも経済力や軍事力が低下したとはいえ、アメリカは依然「唯一の超大国」であり、その動きを理解することは大変興味深いことです。歴史的にも、普遍的理念に基づいて国家を作ってしまったり、19 世紀半ばまで奴隷制が存続し、それが元で内戦が起きたりと、考えてみると不思議がいっぱいの国です。

本研究会では、こうした「飽きのこない」アメリカについて、各自の独自の関心に基づいた研究を重視して活動します。まだきちんと答えられていない、面白い問いを設定し、論理と証拠を適切に用いて答え、新しい知見を生み出せるようになることを重視しています。そのため、アメリカの政治や歴史についての知識も吸収してもらいますが、分析の仕方にも同じ位注意を払います。こう書くと、研究者志望でもなければ縁のないゼミにみえるかもしれません。しかし、研究というのは要するに筋道立った議論で相手を説得するという行為なので、こうしたトレーニングを通じて、どの分野に進んでも役に立つスキルを身につけてほしい、というのがねらいです。そのために、文章を書く課題の添削や合宿、他大学との合同ゼミを開催して研究発表や討論を行うといった工夫をしています。

例年は、現代政治についての理論的・実証的な文献を中心に扱っていますが、2019 年度は主に歴史分析を扱う予定です（現代も扱いますからご安心を）。基礎的な文献で知識を身につけたうえで、担当教員の指導の下、各受講者が自主的にテーマを設定して研究を進め、発表し、論評・助言しあうというのが活動の中心になります。きちんと取り組めば、一年でも驚くほど議論の仕方や文章の書き方が変わります。多くの英語の資料（新聞・雑誌の記事、学術書等）を読みこなし、まとまった議論を組み立てるのには、当然ながら相応の根気と自主性、それに時間が必要になりますが、「わかった」ときの嬉しさは格別です。野心的な皆さんと、緊張感と楽しさが同居する研究会を作っていければと期待しています。

2. 研究対象

アメリカ合衆国の内政を研究対象としています。2018 年度は主に連邦議会を扱い、立法過程における議員の行動分析や空間理論等について勉強しました。また、現代の政治研究で多く用いられる統計分析の基礎についても学ぶことができます。

3. ゼミ生の構成

3 年生（10 期） 6 名（1 名留学中）

4 年生（9 期） 4 名

4. 受け入れ条件

今年度は春・秋両学期を通じて参加できる方に応募を限定します。

法学部政治学科の学生と同じ条件で活動できるのであれば、学部学科問わず受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

私達岡山裕研究会は総勢約 10 名の少人数ゼミで、アメリカ内政を研究対象としています。前述のように、ただアメリカ政治に関する知識を蓄えることを目的にしているのでなく、アメリカ政治という共通のお題で、論理的で説得的な議論を組み立てられることを目的に活動しています。独自の問いを立て、適切な検証を行い、他者を説得する能力は将来仕事をする上でも、最も重要な能力の一つであると言えます。もちろん、ゼミの課題や研究をこなすのは一筋縄ではいきません。しかし、岡山先生は常に学生にオープンで、的確なアドバイスを下さいます。また、先生は関西人らしくユーモアあふれる方なので、飲み会や合宿でも場を盛り上げてくださいます。課題文献や個人の研究を進めていく上で必然的に多くの英語文献を読むことになりますが、特別高い英語読解能力を要求されるわけではないので、心配は不要です。ともに高め合い、議論を活発にしてくれるようなやる気溢れる学生からの応募を是非お待ちしております！

6. ゼミの進め方

◇本ゼミ（水曜 4・5 限連続）

春学期は、先生から指定される課題文献を読み、その中での議論や分析手法について批判的に検討し、考えたことや疑問に感じた点を、ゼミの前日の 16:00 までに A4 用紙 1 枚で提出し、当日に全員で議論します。また、学期途中から小規模の研究を行い、その成果を学期末に発表し、論文形式で提出します。秋学期は、各自合同ゼミや卒論発表に向けて活動し、ゼミ活動時間内に報告、議論を行います。

7. 主な使用文献

随時テーマに応じて指定（先行研究は自然と英語文献が多くなります）。

8. 連絡先

○10 期生外ゼミ代表　鈴木湧士

yskohosei@keio.jp

○10 期生入ゼミ担当　江副舜慧

ezsk.football@gmail.com

粕谷祐子 研究会

－途上国比較政治研究－

1. 粕谷先生より

本研究会は、発展途上国の政治を題材にして論理的なものの考え方を身につけることを主な目的としています。具体的には、途上国地域に共通してみられる政治問題を、比較政治学の理論的観点から検討します。比較政治学は、世界各国の政治現象に対し因果関係の特定を目的として分析する政治学の一分野です。ですので、特定の国・地域の政治を理解することや、途上国の貧困をどう改善できるのか、という政治学の領域を超えた問題の検討は本研究会の主眼ではありません。授業で取り上げる理論的な問題は、例えば、なぜ民主化するのか、経済発展を目指す政府政策はどのような効果があったのか、なぜ内戦がおこるのか、などといったものです。このような問題設定のしかたには、ある地域の固有名詞は含まれませんし、また、途上国政府や援助国はなにを「すべき」というような規範的な姿勢も存在しません。このような問題設定が目指すのは、地域を横断して存在する一般的な因果関係の探求です。本研究が途上国政治の理論的検討をおこなう、というのはこのような意味においてです。とはいえ、理論の応用対象としての地域に関する知識も不可欠であり、これに関しては地域研究関連の授業等で各自対応していただきたいです。

2. 研究対象

途上国比較政治を研究対象とします。発展途上国地域の政治の相違点・共通点から、一般化可能な仮説や理論を立て、過去の研究データや客観的な指標を用いて因果関係を検討します。主な検討課題には、民主化・内戦・権威主義体制・開発援助があげられます。地域研究が得意とする特定の国・地域の固有性の探求や、途上国の貧困をどう改善できるのか、といった政治学の領域を超えた問題の検討は、本研究の主眼ではありません。

3. ゼミ生の構成

3 年生 20 人　4 年生 20 人

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

粕谷ゼミは、学年問わず仲が良く、あたたかな雰囲気ですが、勉強に関しては一人ひとり真剣に取り組んでいます。また様々なバックグラウンドと個性を持ったメンバーが集まっており、刺激の多い環境でもあります。勉強もそうでない場面も全力で取り組み、楽しむことのできるゼミです。ゼミでの学習を通じて、途上国に関する知識はもちろん、論理的なものの考え方も身につけることができます。

6. ゼミの進め方

◇本ゼミ（火曜 4・5 限）

3 年生の春学期には、途上国が抱える政治問題の理論的把握を目的とした文献の精読・討論とリサーチデザインの作成練習を行います。文献を踏まえてテーマに沿った問題設定をし、仮説をたて、そのロジックや検証方法まで含めた発表をします。秋学期には、ゼミ生が各自選んだトピックに関する自主研究とその報告及びレポート作成を行います。4 年生では、卒論の作成に向けて卒論構成の発表を主に行います。

◇サブゼミ（火曜 3 限 or 6 限）

本ゼミの「理論学習」を「現状分析」面から補完することを目的として、発展途上国の地域研究、先行研究、リサーチデザインを作る練習等を行っています。担当者がアフリカ・アジア・ラテンアメリカなど途上国の政治・経済について発表し、発表内容に基づいてグループごとにリサーチデザインを考え、全体で共有します。

7. 主な使用文献

粕谷祐子『比較政治学』ミネルヴァ書房、2014 年 等

毎回テーマに沿った文献を読みます。

8. ホームページアドレス

近日公開予定（Twitter からお知らせします！）

9. 連絡先：

Twitter:@kasuya2019

Mail:kasuyaseminar2019@gmail.com

○10 期生外ゼミ代表：小笠原亜弓

○10 期生入ゼミ担当：久保田健太・小林泰・ 早矢仕桃子・真坂卓実

小嶋華津子 研究会

－現代中国の政治と外交－

1. 小嶋先生より

私のゼミは、二年かけて中国というテーマに挑もうと決意した人たちの集まりです。動機は様々です。旅をして惹き込まれた。住んでみてますます惹き込まれた。三国志が好きだ。やっぱりこれからは中国の時代だ。中国人の彼／彼女ができた。母国を客観的に観察したい。中国が好きになれない自分自身を見つめたい…。思い起こせば四半世紀以上前、フランス語選択だった私が、方針転換をして中国のゼミを選んだのは、得体の知れない存在から目をそらしてきたそれまでの自分自身に挑戦したかったからでした。

動機は何でもよいのです。中国というテーマに真摯に向き合いながら、どのような現象に着目し、どのような視角、方法論を以てアプローチすれば、政治権力、国家と社会の相互浸透、ナショナリズム、国際関係の実態に迫ることができるのかを考え、議論しましょう。それは、政治学という学問を、より人間的で、精緻かつ普遍的なものにするための一歩であり、さらには政治学によって規定される支配的世界観を、より公平なものにするための挑戦でもあります。この知的冒険に参加するためには、明晰な頭脳だけでなく、社会で暮らす人々の息遣いを感じ取る感性や、環境の変化に負けない鈍感な胃袋と強靭な身体が求められるでしょう。

互いに刺激し合いながら、ともに冒険を楽しむ仲間を募ります。二年間責任をもって旅を楽しみ、仲間を楽しませることが条件です。応募をお待ちしています。

2. 研究対象

中華人民共和国成立前後から今日に至る時期を射程に、中国の政治社会および外交について研究します。卒業論文のテーマは、プロレタリア文化大革命期の中国と西洋音楽、映画祭に見る日中関係の変容、「一帯一路」下のロシア極東と中露関係、中国のスポーツ・ビジネス戦略、デジタル社会の到来と国家–市場関係など、実に多様です。それぞれの関心を掘り下げながら、国家権力、民主、ナショナリズム、国際関係といった政治学のテーマについて学問的考察を深めることを目的としています。

3. ゼミ生の構成

4 年生 15 人（うち 1 人留学中）　3 年生 22 人

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可。

5. ゼミ生からのコメント

小嶋先生はとても明るく優しい先生で、ゼミは毎回和やかな雰囲気の中行われます。三田論を書くかどうか、どのようなテーマで卒論を書くかなどについては、全て学生に任せてくれます。中国についての特別な知識は必要としませんが、中国というテーマに関心を持ち、テーマを探究する意欲にあふれた人を歓迎します。

6. ゼミの進め方

活動時間：火曜 3・4 限

3 限に 3 年生、4 限に 4 年生のゼミを開講しています。3 年生の間は、中国の政治社会・外交に関わる幅広い文献を読み、議論します。また半期に 1、2 回、読了した文献の内容からテーマを設定し、2 チームに分かれてディベートを行います。4 年生のゼミは、卒業論文の中間報告が中心となります(4 年生の中間報告には、3 年生も出席し、議論に加わります)。また、不定期に中国映画鑑賞会やインカレ・ゼミを、夏には合宿を行います。

7. 主な使用文献（毎年変わります）

天児慧（2018）『中国政治の社会態制』岩波書店

横山宏章（2014）『中国の愚民主義―「賢人支配」の 100 年』平凡社

章蓉（2017）『コレクティヴ・ジャーナリズム―中国に見るネットメディアの新たな可能性』新聞通信調査会

野嶋剛（2016）『台湾とは何か』筑摩書房

倉田徹・張彧暋（2015）『香港–中国と向き合う自由都市』岩波書店

8. ホームページアドレス

ブログ→https://ameblo.jp/kojimakeio/

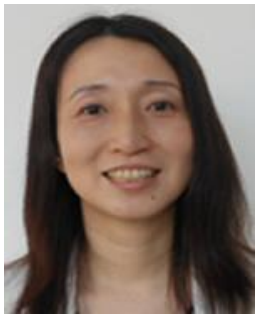
Twitter→@kojima_Keio

9. 連絡先

kojima2019nyuzemi@gmail.com

＜入ゼミ担当＞ 黒田一寛　許文徽　檀上絢子

メール以外希望の場合は…黒田一寛　LINE：kazbrium　　微信：kazupai_1bveRS



杉木明子 研究会
－アフリカ政治研究－

1. 杉木先生より

本研究会は、アフリカの多様性をふまえた上で、アフリカ的文脈からアフリカの現状を政治学、国際政治学のアプローチを用いて分析し、今後の課題を考察することを目的としています。具体的にはアフリカ諸国にとって主要な問題である、民主化・政治体制の移行、貧困削減・開発援助、民族紛争・内戦・「テロ」、平和構築、難民・強制移動民問題、国際犯罪（特に海賊・海上武装強盗、密漁、武器密輸、人身売買など）を中心として扱う予定です。本研究会では現地の情報を可能な限り収集し、アフリカを学ぶとともに、アフリカから日本や世界をとらえ直したいと考えています。

本研究会でアフリカを学ぶことは様々なメリットがあると思います。第一に、新たな知識や知見を取得することができます。多くの人が抱きがちなネガティブなイメージはアフリカ諸国の持つ多様な側面の一面にすぎません。例えば、近年、スポーツ（特にサッカーや陸上）、音楽、ファッションなどの分野ではアフリカ出身者のめざましい活躍がみられるようになってきました。また、紛争解決のために、伝統的な紛争解決のメカニズムを活用し、紛争当事者の和解を促し、地域の平和的な共存を図る平和構築の取り組みや、創意・工夫によって新たな難民支援プログラムを打ち出すなど、アフリカならでは英知や創造性を活かした解決策や対策が行われた先駆的な事例もあります。第二に、アフリカを学ぶことから定説、通説となっている価値観や「事実」をとらえ直し、日本や世界のあり方、そして自分自身の考えを再検討することができるのではないかと思います。第三に、他国や他の地域と比べ、アフリカはマイナーであり、研究者もあまり多くないのですが、それだからこそ所属や専門分野を横断した学際的ネットワーク、連帯意識、協力関係が強いと思います。本研究会ではこれらのネットワークを活かして、国内外の教育・研究機関の学生や研究者を招き合同ゼミや研究会を行い、相互交流を進めていきます。また実践的に諸問題の解決手法を学ぶために実務家（国際機関職員、開発コンサルタント、JICA 職員など）をお招きし、ワークショップも行います。

本研究会は、①何よりもアフリカに関心がある人、②未知なことにチャレンジし、学ぶ意欲と積極性のある人、③様々な事例をミクロ、マクロレベルで理論的に考察することに関心がある人を歓迎します。情報収集を行い、現状を分析し、解決方法や政策に関する提言するスキルを取得することは、将来どのような道を選ぶにしても役立つと思います。皆さんのご応募、お待ちしております。

2. 研究対象

杉木ゼミでは、サハラ以南のアフリカを対象地域として、政治、社会、経済的問題を学びます。アフリカの主要問題と理論的分析（政治理論、国際政治理論）を組み合わせながら、国レベル、地域レベル（例、西アフリカ、東アフリカ、南部アフリカなど）、アフリカをめぐる国際関係（アフリカと EU、アフリカとアメリカ、アフリカと中国など）から考察していきます。担当者の主な研究領域が民族紛争・内戦、平和構築、難民・強制移動民研究です

ので、これらの問題を理論的に学びたい人の参加も歓迎いたします。

3. ゼミ生の構成

3 年生 20 名（うち 2 名留学中、1 名オブザーバー）

4 年生　0 名（2018 年より開講のため在籍者なし）

4. 他学部生の受け入れ

受入可（但し、法学部政治学科の学生と同じように研究会に参加することを前提としております。）

5. ゼミ生からのコメント

杉木ゼミでは、アフリカに関する知識を学び、現状の課題を解決するための議論を重ねています。ゼミの雰囲気は非常に明るく、個性豊かな仲間たちと話し合う時間はとても有意義なものとなっています。杉木先生のアフリカ土産話も面白く、ゼミにいるとますますアフリカの素晴らしい魅力に気付かされます。未知の世界を知ることほど面白いことはありません。ぜひ一緒にアフリカの世界に飛び込んでみませんか？皆様のご参加をゼミ生一同お待ちしております。

6. ゼミの進め方

本ゼミ　火曜 3・4 限（サブゼミ　火曜 5 限　予定）

7. 主な使用文献

・宮本正興・松田素二『新書アフリカ史』講談社

・川田順造編『アフリカ史』山川出版社

・白戸圭一『日本人のためのアフリカ入門』ちくま新書

・松田素二編『アフリカ社会を学ぶ人のために』世界思想社

8. ホームページアドレス

・ゼミ生　Twitter アカウント→　https://twitter.com/sugikisemikeio?lang=ja

・杉木先生　Twitter アカウント→　https://twitter.com/AFRseminar2018

9. 連絡先

・外ゼミ代表　杉山優季

・入ゼミ担当　橋本果奈、工藤翔平、小澤尚生

sugikiseminar@gmail.com

高橋伸夫 研究会

－中国現代政治史研究－

1. 高橋先生より

何年も前、この小冊子の巻頭言で、堤林教授は、自分の学生時代を振り返り、ゼミナールに入ろうとしたとき、「血尿が出るまで」勉強しなければならないといわれたと述べておられた。私の学生時代には、「血便が出るまで」といわれたように記憶しているが、いずれにせよ、多くの学生諸君にとってゼミ生活は大きな試練となるだろう。試練は学問の分野だけにかぎらない。ゼミ生のなかには酒癖の悪い者が必ず一人はいるものだ。あなたをいじめて喜ぶ者さえいるかもしれない。以前、研究棟の談話室で、経済学部のある女子学生が、ゼミ生の皆が自分をのけ者にしているから助けてくれと泣きながら先生に訴えている場面に出くわしたことがある。私自身のゼミ生活を思い起こせば、「引きこもり」に陥った仲間をアパートに励ましにいったこともあるし、反社会的な行為に手を染める教団にとらわれた友人の奪還を試みたこともある。要するに、ゼミナールにおいて皆さんは人間関係のさまざまな問題にぶつかるだろう。しかし、そうした試練は確実に皆さんを鍛えるだろう。だから、試練を買って出るぐらいの意欲を持ってもらいたい。諸君の先輩たちも、この試練を経て、今日の慶応大学のよき評判を築き上げたのだ。私は諸外国の大学の制度を広く知っているわけではないが、このゼミナールという制度は学生にとって悪くないと思う。われわれ教師にとっても、ゼミは重要な時間である。いや、私を含めて多くの教師にとっても重要な時間だ。大教室で数百人の学生を前に講義を行うことを好む教員などいない。自分の専門分野に関心を抱いてくれる比較的少数の学生諸君と濃密な議論の時間を持つほうがよっぽどよい。しかも、これらの諸君とは OB 会を通じて長い間一緒にうまい酒が飲めることを期待できるのだ。正直なところ、そうした濃密な時間をともに過ごすための相手（すなわちゼミ生）をいかに選ぶかは頭の痛い問題である。学力のみならず、意欲、独創性、協調性、その場にいるだけで周囲を明るい気分にさせるような存在感といった要素をどうやって評価すればよいのだろうか。私自身は何年か前、応募者に 3 時間を与えて、どこで（カフェにいようと、図書館にいようと、カラオケにいようと）どんな手段を使っても（インターネットを使っても、友人や親と相談しようとも）構わないから、あるテーマでの小論文を完成させて時間までに持ってくるよう命じたが、期待したほどの力作がなく、がっかりした経験がある。何かユニークで斬新なアイデアがあったら、是非教えてほしい。面白い学生諸君が応募してくれることを切に祈る。

2.　研究対象

「中国的なるもの」にこだわって中国研究をしています。単に現象を追うのではなく、中国社会の根底にある構造、あるいは「変わりにくいもの」を重要視します。例えば、宗教意識（主に儒教）や中国の社会構造の歴史的変容などに焦点を当てつつ、中国社会を理解しようとする試みがこれに当たります。このように中国社会を根底から見つめ、研究する姿勢は、現代中国の政治・外交を考察する際にも非常に有効となります。

3. ゼミ生の構成

3 年生：12 人　4 年生：9 人

4. 他学部生の受け入れ

受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

「中国的なるもの」はなじみのない言葉であるが非常に考えさせられるテーマで、これがなかなか面白い。今までに触れてこなかったからこそ、ばらばらに記憶していた知識が 1 つに結びつく瞬間があるかもしれない。また個性あふれるゼミ生と日々接することで学問以外にも広がるものはあるかもしれない。そしてそれをサポートしてくださるのがユーモアにあふれ、幅広い知識でゼミを盛り立てる高橋伸夫教授なのである。

6. ゼミの進め方

◇本ゼミ（水曜 3 限）

中国社会論の古典的文献や比較政治学の観点から、中国の国家と社会を論じた文献を輪読し、国家と社会の性格についての考察を行います。各文献について担当者がレジュメを作りプレゼンを行い、それをもとにディスカッションを行います。今年は三田祭期間に中国研修を行うため、現地での発表に向けて着々と準備も進めています！

7. 主な使用文献

マックス・ウェーバー著、木全徳雄訳『儒教と道教』創文社、1969 年。

村松佑司『中国経済の社会態制（復刊）』東洋経済新報社、1975 年。

ロイド・イーストマン著、上田信・深尾葉子訳『中国の社会』平凡社、1994 年。など

8.　ホームページアドレス

http://ntakahashiseminar.wixsite.com/ntakahashiseminar

9. 連絡先

〇22 期生外ゼミ代表：石井達瑛 tatsu0125yuzuwine@ezweb.ne.jp

または

〇22 期生入ゼミ担当：飯嶋拓未 takumi1997-r.madrid@docomo.ne.jp

田所昌幸 研究会

－国際政治経済学－

1. 田所先生より

慶應大学で教えるようになって 17 年になります。私は研究会について、一貫して次のような考えでやってきました。それは、研究会は真剣な学問の場であり、決してオチャラケではありませんが、学問は難行苦行である必要はないということです。むしろ私は学問の核心的な意義は、知的な発見を楽しむことにあるのだと思っています。

どうやら慶應の学生の多くは、小さいときから先生に与えられた問題に、確定している正解を出すことに知的エネルギーを費やしてきたのでしょう。しかしこの研究会では、あらかじめ決まった正解を出すことではなく、問うべき問題を自分で見つけ、それに自分なりに答えを出そうとする知的態度の方をより重視したいと思っています。

また学部教育の目的は学問のプロを作ることではなく、よって知識を大量に詰め込んだり、専門的な分析手法を会得したりすることかがゼミの目的ではない、という立場をとっています。だからといって、マスコミで氾濫しているような、「国際」とつくのでちょっと面白そうでオシャレだが、1 年はおろか 1 週間もすると顧みる価値のなくなるような、浅薄な時事解説を提供するつもりはありません。重厚な知性を涵養すること、簡単に言えば深く考えることを経験するこが、学生のこれからの人生に多くを付け加えることになるだろうと思っています。

以上のような考えを実行に移すには、哲学か歴史が一番確かな方法だと私は考えています。なんと言ってもこの二つは流行に左右されません。つまり当研究会はかなり古風なリベラルアーツを重視する立場をとっていて、最新の知的流行を豊富に知りたいという学生の期待には、沿えそうもありません。

運営方針としては、「なるべく教えない」をモットーにしてきました。学問であれ何であれ、結局は内発的な知的関心がなければ、大して意味のある結果は生まないだろうと思っているからです。具体的には 3 年生の間は、国際政治史および国際政治学の基本文献を輪読するとともに、短い文章を随時書いてもらうようにしようと思っています。4 年生には、各々の学生に個人的な研究関心に即して、卒業論文を書いてもらうようにしようと思いますので、論文指導を中心にプログラムを組みたいと思っています。私は週一回の授業以外は何も義務づけることはせず、それ以上のことは学生の意欲があれば協力するという姿勢でやっています。それだけにこの授業の時間は知的に有意義なものでなくてはなりません。ゼミ生もゼミが有意義なものとするべくそれぞれが貢献する責任があることを自覚してもら

いたいと思っています。ですから授業で「知識を得よう」という態度の学生は、私の研究会には不適格です。セミナーは知的に語り合うことに一番の値打ちがありますから、知識の量ではなく、知的に語り合うことができる意欲、能力そして姿勢を、選考の時に判断したいと思っています。

2. 研究対象

3 年生は、20 世紀の国際政治史について、各々の興味関心に応じたトピックから古典的著作を読み、発表・討議します。加えて英字誌の社説を輪読して時事的な話題についても問題点の整理を行っています。国際政治のゼミは様々ありますが、重要な事象が生じた原因とその影響について問うという極めて単純かつ学問的に標準的なことを行なっています。

3. ゼミ生の構成

3 年生 12 人、4 年生 11 人

4. 他学部生の受け入れ

可

5. ゼミ生からのコメント

国際政治系列のなかで珍しい少数精鋭なので、ゼミ生同士の仲がとても良いゼミです。その証拠というとあれですが、僕は今ゼミ合宿中で、皆でワイワイとジェンガしながらこの文章を書いています。先生は国際政治に限らず、幅広い分野について教養を持っていることから、国際政治だけでなく地域文化や宗教など様々な関心分野を持ったゼミ生が集結しています。普段のゼミでは、国際政治史上の出来事がなぜ起こり、どのような意味を持ったのかということを探求して行きます。ゼミ生はそうした疑問に対して自分なりの意見をもち、主体的にゼミに参加していくことが求められています。

6. ゼミの進め方

3 年生の間は、20 世紀の国際政治史について、第 1 次世界大戦、第 2 次世界大戦、冷戦、冷戦後について、それぞれをいくつかのテーマから学びます。同時に Economist 誌などから短い雑誌記事を選び毎週輪読して、現代における欧米の国際政治の見方についても触れていきます。4 年生は各自の関心に従って卒業論文を執筆します。

7. 主な使用文献

国際政治の古典的著作はもちろんですが、それぞれの興味のある分野についての名著も扱います。

8. ホームページアドレス

http://tadokorosemi.wixsite.com/tadokorosemi

9. 連絡先

tadokoro.seminar@gmail.com　入ゼミ担当　内村

西野純也 研究会

－東アジア国際政治・現代韓国朝鮮政治－

1. 西野先生より

本研究会は東アジア国際政治を研究対象とするゼミです。元気よく知的好奇心の旺盛な学生が入会し、ゼミを盛り上げてくれることを期待しています。多様な個性がゼミに集い、互いを尊重しながら共に学び研磨し合う、これが私の目指すゼミの姿です。

私自身の専門領域は東アジアの国際政治、なかでも朝鮮半島をめぐる政治と外交です。北朝鮮の核問題は言うまでもなく、歴史的には南北分断や朝鮮半島、さらに遡れば日清、日露戦争という出来事が如実に示す通り、朝鮮半島は国際政治の主要な舞台の 1 つであり、そこでは日本も中心的なアクターでした。現在でも、日本の安全保障や外交政策において、朝鮮半島情勢は極めて重要な課題であり続けています。一方、南北朝鮮は冷戦によって誕生した分断国家であるがゆえに、韓国、北朝鮮の内政は国際政治情勢と密接かつ不可分に結びついています。朝鮮半島停戦協定の署名主体が北朝鮮、中国、国連軍であることを見ても、朝鮮半島問題が国際性と独自性を併せ持った、大変興味深い研究対象であることがわかります。私が国際政治に関心を持ちながらも、とりわけ朝鮮半島を中心に研究しているのはこのためです。

しかし、みなさんとともに学ぶゼミでは、朝鮮半島のみを題材にするのではなく、広く東アジアの国際政治を研究対象とします。ゼミ生には、特定の地域に限定されることのない、幅広くかつ応用可能な分析力を養って欲しいと考えているためです。そのためゼミでは国際政治全般に関する書籍を数多く取り上げます。国際政治について学ぶことを通じて、社会科学の方法論に則って分析的に物事を考える力を養うことが、本ゼミの重要な目的の 1 つです。

あわせて、ゼミ生には、東アジア国際政治の諸問題や日本が直面する課題を検討し、それらに対する処方箋（解決策、政策）を提示しうる能力、別言すれば現状分析および問題解決のための作法も身につけてもらいたいと思っています。卒業後、外交や安全保障政策に携わることはなくても、そのような作法は広く社会生活の場で必要となると考えているからです。

学生諸君は、ゼミ以外にも、サークルや体育会、就活など、多くの活動で忙しくなるはずです。それでも私は、どんなに忙しくてもゼミを疎かにせず、その他の活動と両立できる、意欲に溢れ、努力を怠らない学生の入会を期待しています。ゼミ生には与えられた課題を受動的にこなすだけではない、ゼミの場で真剣かつ活発に議論に参加する能動性が求められます。はじめは皆、自分の発言に自信がなく遠慮がちですが、ゼミ活動を続けることで成長を実感できるはずです。卒論を書き上げてゼミを卒業することは容易なことではありませんが、ゼミの仲間とともに 2 年間、最後までやり遂げることのできる学生が入会してくれることを楽しみにしています。

2. 研究対象

広く国際政治に関する文献を多く購読しますが、とりわけ東アジア国際政治全般および関係各国の外交・安全保障政策に関する文献を購読して議論します。

3. ゼミ生の構成

3 年生 23 名（うち 4 名留学） 4 年生 25 名

4. 他学部生の受け入れ可否

可。ただし、所属学部・学科の規定をよく確認してから応募してください。他学部・学科とのゼミ掛け持ちは原則認めません。

5. ゼミ生からのコメント

国際政治系列の研究会は多くありますが、西野研究会では、通常のゼミ以外にシンポジウムへの参加や観光大使館訪問など、実際に足を運び専門家の方々と意見交換させていただく機会を大切にしています。ゼミ生の数は比較的多く、それも魅力の 1 つです。様々な背景を持ち、多様なフィールドで活躍する仲間と議論するゼミは毎回非常に刺激的で、西野先生はお忙しい中でも一人一人を見て的確なアドバイスをくださいます。また、ゼミ生は勉強以外にも常に全力で、合宿、ゼミの後のご飯、飲み会、先輩方との懇親会など様々な機会を通じて絆を深めています。常にアットホームな雰囲気で、でもやるときはやる。それが西野研究会です。課題や年間予定について詳しい話ができると思うので、まずは個別説明会にお越しください！また、オープンゼミは実施しないため、三田祭共同研究発表を見に来てください！

6. ゼミの進め方

- 本ゼミ（木曜日 4・5 限）

毎週、国際政治や東アジアの地域政治に関する文献を読み、書評レポートを提出したうえで、文献の内容に基づいて論点を設定し、討論を行います。討論は 5～6 名の小さいグループに分かれて、話し合ったことをグループごとに発表、それに対してグループのゼミ生が批判や疑問を投げかけることで、討論をさらに深めます。先生は、討論中のグループを回り、討論の方向性を修正してくださり、発表に対するアドバイスをくださいます。

- サブゼミ

原則として行いませんが、三田論執筆などで自主的に勉強会を行う場合もあります。

7. 主な使用文献

- 五百旗頭真『戦後日本外交史』第 3 補訂版、有斐閣アルマ、2014 年。
- 佐々木卓也『戦後アメリカ外交史』第 3 版、有斐閣アルマ、2017 年。
- 趙世瑛（姜喜代訳）『日韓外交史−対立と協力の 50 年』平凡社新書、2015 年。
- 平岩俊司『北朝鮮はいま、何を考えているのか』NHK 出版、2017 年。

8. ホームページアドレス http://nishinojunyasemina.wixsite.com/homepage

9. 連絡先

7 期外ゼミ代表：奥田和志、7 期入ゼミ担当：篠田健人・滝澤周一郎・三好由実

nishinojunyaseminar@gmail.com まで

細谷雄一 研究会

－西洋外交史・国際政治－

1. 細谷先生より

みなさんは大学に入って、学問を楽しんでいますか? 好きな学問分野を見つけて魅力的な本に出会っていますか? 私は、それを実現するためにもみなさんのお手伝いをしたいと思っています。その上で、この研究会では二つのことに力を入れることにしています。

一つは、学問を「楽しむ」ということです。そしてもう一つは、自らが「成長する」ということです。努力をしてたくさん勉強をしても、それが楽しくなければ長続きはしません。他方でどれだけ楽しいとしても、それが自らを成長させないならば、本当の喜びはなかなか手に入らないかもしれません。したがって、この二つの要素は同時に満たす必要があるのだと考えています。

それではなぜ西洋外交史、ヨーロッパの歴史を学ぶのでしょうか? 過去のことを知るよりも、現代の激動の国際情勢を学ぶ方が、意義があるのではないでしょうか?それは、現在の全ての問題が必ず何らかのかたちで、歴史的な根をもっているからです。換言すれば、現代の問題を歴史的な知識なしで深く理解することはできないからです。みなさんが社会に出てからは、なかなかゆっくりと問題を奥深く、根源的かつ体系的に学ぶ余裕がなくなることと思います。大学時代に、物事を本質的かつ根源的に理解する努力を続けることは、一生の財産となることでしょう。

他方でこの研究会では、ヨーロッパのみを学ぶというわけではありません。あくまでも西洋外交史、国際政治学を学ぶことを目的としながらも、それを幅広い視野から学びます。たとえば、歴史を振り返ると、ヨーロッパがいかに中東やアフリカ、ロシア、アジア、日本、そしてアメリカと深い関係にあったかが理解できます。

知的な楽しみを得るためには、一定のコストが必要です。それは知的なコスト、時間的なコスト、経済的なコストが含まれます。良書が常に安価とは限りません。重厚なテキストを読むことに予想以上の時間がかかるかもしれません。そして何よりも、根源的な問題を理解するために、幅広い基礎知識を必要と感じるかもしれません。参加を希望される皆さんには、それらのコストを払う覚悟をして頂きます。それらのコストは、「無駄遣い」とは思いません。むしろ、皆さんの大学時代を鮮やかに彩る栄養となり、喜びとなることを確信しています。意欲ある皆さんの参加をお待ちしています。

2. 研究対象

細谷ゼミの主な研究対象は西洋外交史です。3 年生の春学期は、学問方法論、歴史学入門、ヨーロッパ史入門など基礎的な文献を講読することで根源的なテーマに取り組んでいきます。秋学期からは、より具体的な内容を取り扱うことで西洋外交史に関する専門的な理解を深め、4 年次にはそれらを基軸として現代の多様な国際政治の問題を扱っていきます。歴史を学ぶだけでなく、そこから現代の国際政治を考察するということもこの研究会の 1 つの大きなテーマとなっています。

3. ゼミ生の構成

3 年生 34 人（9 名が留学中） 4 年生 25 人

4. 他学部生の受け入れ可否

受け入れ可

5. ゼミ生からのコメント

ゼミでは毎回様々な視点から問題が提起され、先生による丁寧な解説に加えて各々が多様なバックグラウンドを持つゼミ生たちが議論を行うため、とても学びの多い刺激的な 3 時間となっています。ゼミの雰囲気も落ち着いていて明るく、ゼミ生には優秀な人が多いです。そのため先生からはもちろんのこと、ゼミ生たちからも学ぶところが数多くあり、学生同士でお互いに刺激し合い成長できる環境があるところもまたこのゼミの魅力です。

6. ゼミの進め方

◇3 年生（水曜 4・5 限）、4 年生（水曜 3 限）

毎週 1 冊テキストを読み、内容を報告する報告者、議題を提供する討論者の発表の後、グループディスカッション、全体ディスカッションを行います。また、サブゼミは特に行っていません。

7. ホームページ

https://keiohosoyazemi.wixsite.com/http

主な使用文献はこちらのホームページを参照ください。

8. 連絡先

〇11 期生ゼミ代表 鈴木陽大

〇11 期生入ゼミ担当　岸川優也、稲川梨沙、笹岡拓未、若狭祐貴

hosoya.seminar2019@gmail.com

Twitter @hosoyazemi2019

宮岡勲 研究会

－安全保障研究・国際政治理論－

1. 宮岡先生より

安全保障とは酸素のようなものであり、それが希薄になり息が苦しくなるまでは、人々はその重要性に気づかないが、実際にそうした状況になれば、それ以外のことは考えられないほどに重要なのである（ジョセフ・ナイハーバード大学特別功労名誉教授）。

北朝鮮による核兵器や弾道ミサイルの開発や、海外において邦人や日本の権益が被害を受けるテロの発生など、日本を取り巻く安全保障環境は、一層厳しさを増しています。このような状況に対して、私たちはどのように考え、どのように対応すべきなのでしょうか。

本研究会は、安全保障問題を理論的に分析できる力を養うことを目的としています。ここでいう理論とは、ある現象とその主要な原因とをつなぐ因果関係に関する知識のことです。リアリズムやリベラリズムといった主要な国際政治理論には、過去の世界で起きた国家間の対立や協調などを分析して得られてきた人類の英知が集約されています。異なる理論を身につけることにより、様々な国際政治現象を多面的に捉えられるようになります。また、理論的思考に基づく仮説検証により問題の解決を図るという科学的な姿勢を体得します。これこそ、慶應義塾伝統の「実学（実証科学）の精神」と呼ばれているものです。（ただし、理論重視とは言っても数学や統計手法は使いません。）

また、本研究会は、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を高めることも目的としています。このような力を経済産業省は「社会人基礎力」と名付けました。それは、就職前に身につけておいてほしいと企業が考えている能力のことでもあります。本研究会では、①体系的に議論を評価するための批判的思考力（Critical thinking）、②人々の協働に欠かせないコミュニケーション能力（Communication）、および③コミットしたことに最後まで粘り強く取り組む行動力（Commitment）の 3 つの「C 能力」に重きが置かれています。

以上の目的から、本研究会が歓迎したい方とは、「安全保障問題の理論的分析力と実用的な社会人基礎力を身につけるために、“研究会活動への責任ある関与”および“師友とのこまめな話し合い”を二年間続けていく強い意志を有する学生」としています。そのような意志があれば、安全保障問題や国際政治理論の基礎知識の有無は問いません。

本研究会の入ゼミ活動では、研究会側とゼミ生側とのニーズにミスマッチが生じないよう、研究やその他の活動の実態について、真面目な取り組みから生じる厳しい面も含め、ありのままの情報を提供しています。ぜひ充実した研究会ウェブサイトをご覧いただくとともに、説明会等の入ゼミ活動に気楽に参加してみてください。本研究会の理念や特徴に共感していただける方からのご応募をお待ちしております。

2. 研究対象

主に現代の安全保障問題を対象にしています。特定の地域・国といった限定はありません。軍事力による国家の平和と安全が中心的なテーマとなります。ちなみに今年度の 3 年生は、米国の核抑止力と日本の安全保障に関する共同研究

を行っています。ただし、4 年次の卒業論文については、非国家的アクターや、経済・環境・資源などの非軍事的側面まで含めた広義の安全保障の範囲から研究テーマを自由に選択することができます。

3. ゼミ生の構成（2018 年度）

8 期生（4 年生）：7 人（商学部 1 人を含む）

9 期生（3 年生）：12 人（法律学科 1 人と商学部 1 人を含む）

4. 他学部・他学科生の受け入れ可否

第 1 次選考のみ若干名、受け入れ可（兼ゼミ不可）

5. ゼミ生からのコメント

私たちの研究会では、安全保障問題や国際政治理論を勉強することで、世界情勢を客観的・多角的に分析する力が養われます。

宮岡先生はゼミ生の成長を願い、とても熱心に指導してくださいます。外務省職員としての経験も踏まえて、国際政治の研究だけではなく、タスク管理力や書類・メール作成力などの就活や卒業後にも役立つ社会人基礎力についてもご教示くださいます。

本研究会では、会員数を各学年 10 名程度に抑えていることもあって同期の一体感が強く、ゼミ生全員による活発な議論が交わされています。また、合宿や同窓会合、メーリングリスト等を通して教員や上・下級生、OBOG との交流も盛んです。さらに、米海軍兵学校との合同ゼミや自衛隊見学など貴重な経験ができることも本研究会の特徴と言えます。

6. ゼミの進め方

◇ 3 年本ゼミ（火曜 3 限）

国際政治理論の日本語文献（春学期）と安全保障研究の英語文献（秋学期）を輪読します。要約力の養成と対話・議論の活性化のため、ゼミ生全員が毎週各自で文献を読んだうえでレジュメ（A4 判用紙一枚、900 字以上）を準備します。

◇ 3 年サブゼミ・合同会議（火曜 4 限）

サブゼミでは、院生を講師とするクリティカル・シンキング（批判的思考力）の演習や、三田祭共同論文や防衛大での学生シンポジウム発表の準備を行います。

◇ 4 年本ゼミ（火曜 5 限）

卒業論文研究の報告・相談を行います。

7. 使用文献

ホームページ「研究会紹介」の「使用文献」を参照してください。

8. ホームページアドレス等

ホームページ：https://miyaokazemi.jimdo.com/　　ツイッター：@miyaokakeio

9．連絡先

入ゼミ係　千草歩実（ちぐさ　あゆみ）　miyaoka0seminar@gmail.com

注意：miyaoka の後には数字のゼロが入ります。

山本信人 研究会

－国際政治・東南アジア地域研究－

1. 山本先生より

2017 年 8 月以来、ミャンマー西部ラカイン州では軍が主導する掃討作戦によって、70 万人以上のイスラム系少数民族ロヒンギャが隣国バングラデシュへと追われた。難民と化したロヒンギャはいまだにバングラデシュの難民キャンプで厳しい生活環境の下に置かれている。

軍の掃討作戦についての詳細な事実関係はわからない。しかし、軍がレイプ、殺人、放火などをおこなったという証言は数多くある。一連の軍による残虐行為について、国連は「教科書的な民族浄化」の事案としてミャンマー政府を非難する声明を出しているほどである。ところが、ミャンマー政府は軍による掃討作戦の正当性を唱えてひかない。曰く、ラカイン州に潜むベンガル系テロリスト集団である「アラカン・ロヒンギャ救世軍」（ARSA）の掃討作戦である。ミャンマー政府の実質的指導者であるアウン・サン・スー・チーも軍の行動のみならず、ロヒンギャ難民についても口を閉ざしたままである。

以上を要するに、ロヒンギャ難民をめぐる問題に関して、国際社会とミャンマー政府は相容れない関係にある。とはいえ、2018 年に入ってからはようやく事態は動き始める兆しがある。ロヒンギャ難民の「帰国」をめぐるミャンマー政府とバングラデシュ政府や国際組織との協議は進展し、環境が整えばミャンマー政府はロヒンギャの帰還を認めるとの意向を示した。しかしながら、ミャンマー政府はいまだに、ロヒンギャは不法滞在者であるとの立場を変えないし、国際法的にロヒンギャは無国籍者のままである状況には変化がない。

それだけではない。ロヒンギャ問題をめぐっては、ミャンマー当局の姿勢が強固になっているとも捉えられる事態が展開している。2018 年 9 月 3 日、ミャンマー最大都市にあるヤンゴン地方裁判所は、ロイター通信社所属のミャンマー人記者 2 人に対して禁錮 7 年の有罪判決を言い渡した。2 人は 2017 年 12 月に逮捕され、英植民地時代の 1923 年に制定された国家機密法に違反した罪で起訴されていた。イェ・ルウィン判事は「被告らに国益を害する意図があったことが判明した」として、「2 人は国家機密法に違反した。それぞれ禁錮 7 年を言い渡す」と述べた。

2 人の記者の名はワ・ロン（32 歳）、チョー・ソウ・ウー（28 歳）。いずれもミャンマー国籍保持者である。かれらは、2017 年 9 月にラカイン州インディン村で発生したロヒンギャ 10 人の虐殺事件を取材していた。かれらの主張によると、取材の過程にあたる 12 月 12 日、ヤンゴンで警察官に招待された夕食の席で文書を手渡され、店を出たところで機密文書所持の容疑で逮捕された。そして逮捕後 2 週間は監禁状態に置かれ、その後ヤンゴンのインセイン刑務所に収監された。

判決を受けて、被告側弁護人は直ちに上訴の意向を示している。記者の拘束と裁判をめぐっては、報道の自由に対する攻撃、人権侵害との非難がロイター通信社だけではなく国連などからも起こっている。同時に、ロヒンギャ難民問題に関して国際社会からは、ミャンマー民主化運動の象徴でありノーベル平和賞を受賞したアウン・サン・スー・チー政権の無作為に対する戸惑い、失望、怒りが沸き起こっている。

ここで紹介した事案は、国際社会と国内政治とのせめぎ合いである。さて以上のような状況をどのように理解するのか。

（2018 年 9 月 3 日記）

2. 研究対象

主に東南アジア・国際関係に関する共通読書を 3・4 年生合同で行ない、ゼミ生各々が興味のある分野における個人研究に取り組んでいます。

【4 年生個人研究（卒論テーマ)】「ソフトパワーの潜在可能性―教育、経済、外交の視点から」、「ジェンダー・アイデンティティと言語の関連性の考察」、「外国人技能実習制度の光と影―大分県佐伯市の水産加工分野における実態をもとに」など

3. ゼミ生の構成

3 年生：4 名（2018 年 9 月現在、うち 3 名がオランダ、スイス、ドイツに留学中）

4 年生：4 名（うち 1 名が 2018 年 9 月卒業）

4. 他学部生の受け入れ

原則不可

5. ゼミ生からのコメント

当ゼミでは国際関係論・東南アジア地域が専門の山本先生のもとで、共通読書と個人研究を中心にゼミ活動を行なっております。授業内では試行錯誤しながら各々の興味対象を深く掘り下げたり、文献を全員で議論しながら読み解いたりと、毎回のゼミの密度が非常に高いです。3・4 年生一緒に学ぶ（現状）少人数ゼミなので、自分の発言や疑問に対して濃いフィードバックと刺激を受けることができます。また山本先生も先輩も、研究のみならず、将来についてなどの個人的な相談にものって下さいます。

ゼミ卒業生の進路は民間企業以外にも外交官や弁護士、公務員など多岐にわたります。

留学はどのタイミングでも可能です。

6. ゼミの進め方

【本ゼミ：火曜 4–5（6）限】　当研究会では、主として共通読書と個人研究を行ないます。

【共通読書】　ゼミ生全員で一つの文献（春学期は国際関係に関する英文献が主）を事前に読み、先生やゼミ生と内容に関する疑問を共有、議論します。単に知識を取得するだけではなく、自分の思い込みや先入観に気づくことが多々あります。少しずつではありますが、考える読書が身につきます。

【個人研究】　各自が興味分野の個人研究に関するペーパーを作成し、ゼミの時間には先生や他のゼミからのコメントを基に議論を深め、問いを発展させます。

7. 主な使用文献

【2018 年度春学期】

1. Pille Petersoo, “What does ‘we’ mean?: National deixis in the media,” *Journal of Language and Politics*, 2007
2. Kenneth G. Dau-Schmidt and Carmen L. Brun, “Lost in Translation,” *Columbia Journal of Transnational Law*, 2006
3. 中西寛『国際政治とは何か』中央公論新社、2003
4. Philip S. Gorski, “Historicizing the Secularization Debate,” *American Sociological Review*, 2000
5. Duncan Bell, “What Is Liberalism?,” *Political Theory*, 2014
6. Laura Hein, “The Cultural Career of the Japanese Economy,” *Third World Quarterly*, 2008

8. ホームページアドレス

http://yamamotonobuto.wixsite.com/keiolawpolitics

9. 連絡先

【18 期ゼミ代表】加藤瑠莉（3 年）yamamotoseminar.nyuuzemi@gmail.com（PC）

2019年度入ゼミ・スケジュール

○6月30日（土）　【入ゼミ相談会】
政治学科ゼミについての説明・資料配布を行います。各ゼミによる個別の相談も受け付けます。

○10月6日（土）　【入ゼミ説明会】
政治学科ゼミについての説明・資料配布を、6月の相談会の内容より詳しく行います。各ゼミによる個別の相談も受け付けます。

○10～11月　【個別相談会】
ゼミごとに説明会を開催します。開催の情報は各ゼミのホームページ・Twitter等で確認してください。個別説明会に参加し、入りたいと思うゼミを選びます。

○11月下旬　【入ゼミ課題の発表】
ゼミごとの入ゼミ課題を、日吉キャンパス法学部掲示板前、もしくは政治学科掲示板に発表します。同内容の発表を、政治学科ゼミナール委員会のホームページでも行います。ゼミによっては、ゼミ独自のホームページ・Twitter等で発表する場合もあります。各自、志望するゼミの課題を確認してください。

○12月中（場合によっては1月）　【入ゼミ課題の作成・提出】
入ゼミ課題の提出方法はゼミによって異なりますが、担当教授への郵送、メール添付等にて提出します。各自、志望するゼミの提出方法を確認してください。

○2019年2月4日（月）　【第1次統一選考】
政治学科の全ゼミの第1次統一選考は、2月4日（月）に三田キャンパスで行われます。各ゼミが指定する教室に行き、選考を受けてください。選考の内容は各ゼミにより異なりますが、教授・院生・ゼミ生との面接が主です。

○2019年2月上旬　【第1次統一選考・結果発表】
三田キャンパス及び日吉キャンパスの掲示板に、合格者の学籍番号を発表します。

○2019年2月上旬　【第2次統一選考・募集ゼミの発表】
政治学科のゼミのうち、第2次統一選考が行われるゼミを発表します。

○2019 年 2 月中　【第 2 次統一選考・説明会】
第 2 次統一選考が行われるゼミの説明会を行います。第 2 次統一選考が行われるゼミの担当者に、課題提出や面接等について、直接質問することができます。

○2019 年 3 月 2 日（土）　【第 2 次統一選考】
第 2 次統一選考は、三田キャンパスで行われます。各ゼミが指定する教室に行き、選考を受けてください。

○2019 年 3 月上旬　【第 2 次統一選考・結果発表】
第 2 次統一選考の結果発表は、各ゼミにより行われます。各ゼミの指示に従ってください。

○2019 年 3 月中　【第 3 次選考】
第 3 次選考は各ゼミが日時・場所・選考内容を発表します。各ゼミが発表する情報を各ゼミのホームページ・Twitter 等で確認し、選考を受けてください。結果発表も各ゼミにより行われます。

入ゼミに関する質問

入ゼミに関する質問は、以下に従いメールを送信してください。
①件名・内容を具体的に記入する。
②メールの本文末尾に、所属学部・学科・学年・組・学籍番号・氏名を明記する。
③seizemi.nyuzemi2019@gmail.com に送信する。

詳しい情報はホームページ・Twitter で確認してください。
入ゼミに関する新しい情報を逐一発信しています。
・ホームページ http://keio-seizemi.wixsite.com/committee
・Twitter @seizemi_keio

以上

法学部政治学科ゼミナール委員会
入ゼミ担当

入ゼミ説明会　配布資料

発　　行　2018 年 10 月 6 日

発　行　所　慶應義塾大学法学部政治学科ゼミナール委員会

東京都港区三田 2 丁目 15 番 45 号

慶應義塾大学西校舎学生団体ルーム 32 番

印刷・製本　梅沢印刷所